2026 韓日交流 作文コンテスト

作品集

応募部門
6 部門

エッセイ

日本語エッセイ 中高生部門
韓国語エッセイ 中高生部門
日本語エッセイ 一般部門
韓国語エッセイ 一般部門

川柳・俳句

※小学生から一般の方まで対象

日本語川柳・俳句部門
韓国語川柳・俳句部門

〔主催〕駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院
〔共催〕駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院 〔協力〕韓国観光公社、韓国コンテンツ振興院、韓国農水産食品流通公社

2026

韓日交流 作文コンテスト

作品集



INDEX

実施概要 …… 4

審査結果 …… 6

審査評 …… 9

受賞作品

日本語エッセイ中高生部門 …… 14

日本語エッセイ一般部門 …… 21

韓国語エッセイ中高生部門 …… 28

韓国語エッセイ一般部門 …… 35

日本語川柳・俳句部門 …… 42

韓国語川柳・俳句部門 …… 44

2026 韓日交流 作文コンテスト




2026
韓日交流
作文
コンテスト
한일교류 작문 콘테스트
未来世代を担う両国の子供から一般の方まで幅広い方々を対象に、
互いへの想いを伝え合い、新しい「絆」作りのためのエッセイ、川柳・俳句を募集します。
日韓往復旅行券など、ステキな賞品を揃えて皆さんのご応募をお待ちしています！
www.koreanculture.jp
応募部門
6部門
エッセイ
日本語エッセイ 中高生部門
韓国語エッセイ 中高生部門
日本語エッセイ 一般部門
韓国語エッセイ 一般部門
川柳・俳句
※小学生から一般の方まで対象
日本語川柳・俳句部門
韓国語川柳・俳句部門
応募受付
2026年
7月6日〔月〕～
8月16日〔日〕
※応募は随時受け付けます。
発表
2026年
9月4日〔金〕
韓国文化院ホームページにて発表
※結果の個別発送は行いませんので
予めご了承ください。
www.koreanculture.jp
賞（予定）
最優秀賞（各部門1名、計6名）
賞状、副賞（往復往復旅行券1名分）
優秀賞（各部門2名、計12名）
賞状、副賞（SAMSUNG ブルートゥースイヤホン）
佳作（各部門4名、計24名）
賞状、副賞（ミニフォトプリンター）
入選（各部門12名、計72名）
賞状、副賞（韓国語学習書）
受賞作品展示会（予定）
2026年
10月1日〔木〕～10月15日〔木〕
駐日韓国大使館 韓国文化院にて
〔主催〕駐日本国大韓民国大使館 韓国文化院、東京韓国教育院 〔共催〕駐大阪大韓民国総領事館 韓国文化院 〔協力〕韓国観光公社、韓国コンテンツ振興院、韓国農水産食品流通公社
●お問い合わせ 03-3357-5970（平日10～17時）contest@koreanculture.jp

コンテストポスター

実施概要

事業名

韓日交流 作文コンテスト2026

～ 皆さんの想いを伝えてみませんか ～

【日程】

◉ 作品募集：2026 年 7 月 6 日（月）～ 8 月 16 日（日）
◉ 審査（1 ～ 3 次）：2026 年 8 月 17 日（月）～ 9 月 2 日（水）
◉ 審査結果発表：2026 年 9 月 4 日（金）
◉ 受賞作品展示：2026 年 10 月 1 日（木）～ 10 月 15 日（木）

【趣旨】

未来世代を担う両国の子供から一般の方まで幅広い方々を対象に、
互いへの想いを伝え合い、新しい「絆」作りのためのエッセイ、川柳・俳句を募集し、表彰する。

【募集部門】 全 6 部門

＜エッセイ＞
日本語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象
韓国語エッセイ 中高生部門：中学生から高校生までが対象
日本語エッセイ 一般部門：一般の方が対象
韓国語エッセイ 一般部門：一般の方が対象

＜川柳・俳句＞
日本語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象
韓国語川柳・俳句部門：小学生から一般の方まで対象

【応募規定】

＜日本語エッセイ（中高生・一般）部門、韓国語エッセイ（中高生・一般）部門＞

◆ テーマ（次の中から択一）

A　韓国文化コンテンツ（ex. 韓国語、K-POP、ビューティー、ドラマ、映画、ゲームなど）
B　スポーツ（ex. ワールドカップ、アジア競技大会など）
C　韓国観光（例：私の 00 旅行記、おすすめ旅行地など）
D　韓国料理（例：キムチ、ビビンバ、トッポギなど）
E　韓日交流（例：私が考える日韓交流など）

＜日本語川柳・俳句、韓国語川柳・俳句部門＞

◆ テーマ

自由（但し、日本語川柳・俳句部門の場合、韓国または韓国語に関するもの）

【審査方法】

駐日韓国大使館 韓国文化院内で部門ごとに審査委員が集まり、審査会を開催

【審査員】

◆ 総評

呉英元〔二松学舎大学名誉教授・駐日韓国文化院 世宗学堂長〕

◆ 日本語エッセイ（中高生・一般）部門

桜井泉〔釜山・東西大学客員教授、元朝日新聞記者〕
深沢潮〔小説家〕

◆ 韓国語エッセイ（中高生・一般）部門

李允希〔元東京成徳大学教授〕
南潤珍〔東京外国語大学教授〕
武井一〔東京都立日比谷高等学校教員〕

◆ 日本語川柳・俳句部門

兼若逸之〔元東京女子大学教授〕

◆ 韓国語川柳・俳句部門

チョ・ヒチョル〔日本薬科大学 客員教授、元東海大学教授〕

審査結果

（総応募作数：4,504 作）

日本語エッセイ 中高生部門（応募作数：195 作）

最優秀賞（1 名）

駒崎流士（公文国際学園高等部）

優秀賞（2 名）

張亜凜（富士見丘高等学校）
永井奏奈（桜花学園高等学校）

佳作（4 名）

宮園凛音（鹿児島情報高等学校）
西本千晴（仙台白百合学園高等学校）
佐野満麗那（五ヶ瀬中等教育学校）
小松澤拓登（立教池袋高等学校）

入選（12 名）

石黒巧（学習院高等科）
込山勇輝（東京韓国中学校）
山内萌々夏（昭和女子大学附属昭和高等学校）
須賀野乃（共愛学園高等学校）
石橋能和（郁文館グローバル高校）
越智黛門（お茶の水女子大学附属中学校）
京田優花（大阪教育大学附属平野中学校）
本郷なの（法政大学国際高等学校）
福本柚月葉（法政大学国際高等学校）
古澤愛絆（日本航空高等学校）
神谷友理（聖ヨゼフ学園高等学校）
小森裕馬（立教池袋高等学校）

日本語エッセイ 一般部門（応募作数：212 作）

最優秀賞（1 名）

遠藤伸一（福島県）

優秀賞（2 名）

中村邦夫（東京都）
佐伯理奈（慶應義塾大学）

佳作（4 名）

水島論子（大阪府）
大西郁也（長野県）
末吉真凰（早稲田大学）
淺田雅人（京都府）

入選（12 名）

鈴木崇真（大阪府）
狩野絢音（明治大学）
宮畑千恵（千葉県）
古賀史子（愛知県）
佐藤志音（日本女子大学）
萩原花胡（明治学院大学）
木下知優（同志社大学）
宮里茉采（神奈川県）
小島拓朗（京都大学）
松浦歩美（東京都）
佐藤叶都（宮城県）
横井都美（東京都）

韓国語 エッセイ 中高生部門
(応募作数：141 作)

最優秀賞（1 名）

平田大葵（群馬県立中央中等教育学校）

優秀賞（2 名）

坪井杏佳（盈進高等学校）
吉田光誠（青山学院高等部）

佳作（4 名）

最上和香（大仙市立大曲南中学校）
藏森志乃（長崎県立対馬高等学校）
坂入優奈（玉川聖学院高等部）
長田莉桜奈（光塩女子学院高等科）

入選（12 名）

中野心瑚（広島女学院高等学校）
稲富友希（関東国際高等学校）
山内智惠（おおぞら高等学校）
前田禎吉（京都国際中学校）
浮本葵（中京高等学校）
吉田あかり（東京都立小平高等学校）
岡柚希（富山県立志貴野高等学校）
倉田理央（さいたま市立大宮国際中等教育学校）
中村珠菜（法政大学国際高等学校）
松本実結（法政大学国際高等学校）
市川菜穂（飛鳥未来きぼう高等学校）
富永眞夕（広島市立舟入高等学校）

韓国語 エッセイ 一般部門
(応募作数：237 作)

最優秀賞（1 名）

清水理愛（帝塚山学院大学）

優秀賞（2 名）

草野洋子（千葉県）
樫本來奈（帝塚山学院大学）

佳作（4 名）

高橋里奈（東京都）
大江千晴（東京都）
鷲尾有咲（新潟大学）
田中紗季（中京大学）

入選（12 名）

髙橋さやか（新潟大学）
福井紗希（新潟大学）
渋谷玲菜（日本外国語専門学校）
本田瑠音（日本外国語専門学校）
岸田七海（神田外語学院）
大内香奈（神田外語大学）
榎下眞琴（帝塚山学院大学）
西家夏（神奈川県）
熊井敦子（東京都）
原田七海（兵庫県）
山梨彰子（東京都）
森田翠（日本外国語専門学校）

日本語川柳・俳句部門
(応募作数：2,764 作)

最優秀賞（1 名）

岸野由夏里（京都府）

優秀賞（2 名）

長谷川佳菜（八千代松陰高等学校）
李東映（大阪府）

佳作（4 名）

大谷康矩（山口県）
水澤佳乃（新潟大学）
森田結衣（長野県）
田中和美（神奈川県）

入選（12 名）

竹内暖（法政大学国際高等学校）
上田省吾（京都府）
小林和子（東京都）
石倉花梨（鳥取県立境高等学校）
西鉄平（京都国際高等学校）
千里内麻唯（東京都）
吉田可依（啓明学園高等学校）
藤塚玲（立教池袋高等学校）
森谷柊月（北海商科大学）
フジサワまさと（清泉大学）
内藤ちえ（東京都）
根本弘子（茨城県）

韓国語川柳・俳句部門（応募作数：955 作）

最優秀賞（1 名）

若本朋子（千葉県）

優秀賞（2 名）

濱田恵美（埼玉県）
井戸沼亜里沙（東京都）

佳作（4 名）

江崎定幸（東京都）
黄田汐音（北海商科大学）
秋田宗志（筑波大学大学院）
鈴木いさ美（東京都）

入選（12 名）

村上颯海（京都国際高等学校）
工藤優妃那（北海商科大学）
猪爪純一（東京都）
柳澤紫乃（北海商科大学）
大島俊恵（東京都）
湯澤葉子（東京都）
春日智子（東京都）
齋藤紗月（北海商科大学）
小坂杏璃（北海商科大学）
今川怜香（帝塚山学院大学）
山田敬（新潟県立大学）
千葉玲哉（北海商科大学）

賞

最優秀賞（各部門 1 名、計 6 名）
賞状、副賞（日韓往復旅行券 1 名分）

優秀賞（各部門 2 名、計 12 名）
賞状、副賞（SAMSUNG ブルートゥースイヤホン）

佳作（各部門 4 名、計 24 名）
賞状、副賞（ミニフォトプリンター）

入選（各部門 12 名、計 72 名）
賞状、副賞（韓国語学習書）

審査評

日本語エッセイ中高生・一般部門 審査評

桜井泉〔釜山・東西大学客員教授、元朝日新聞記者〕



偶然の出会いを大切に

NHKテレビの「鶴瓶の家族に乾杯」、先日は韓国編でした。俳優の奈緒さんがソウルや水原（スウォン）の街で出会った人たちと、韓国語でやりとりしていました。福岡出身の奈緒さんは、高校の卒業旅行で韓国に行ったのがきっかけで、10年ほど前に1年間、塾で言葉を学んだそうです。奈緒さんが韓国語で話しかけると、人々は、みな表情をほころばせました。鶴瓶がスタジオで思わず、つぶやきました。「ちょっと韓国の言葉を知ってるといいね」。言葉は、相手を理解する大切な一歩です。

中高生の部、最優秀賞は、公文国際学園高等部の駒崎流士さんの「私の道標となった、韓国の友へ」です。日本軍は、戦争中にフィリピンを占領しました。幼いころ、フィリピンで過ごした駒崎さんですが、「英雄を称える日」には、フィリピンの子どもたちから非難を浴びました。そんなときに韓国人の男の子が、「こいつがやったわけじゃない。お前らは友達じゃないのか？」とかばってくれました。

韓国も日本による植民地支配の被害を受けました。でも、この友だちは、「歴史という壁を乗り越え」て「盾」になってくれました。駒崎さんは考えました。「歴史を知り、受け止めた上で、国や過去という大きな主語ではなく、『私とあなた』という個人レベルで向き合い、手を取り合うこと」、それこそが「未来に向けた真の交流」を生み出すと。「どんな人にも偏見を持たず、公正に優しく生きよう」と誓う駒崎さん。アジアの人々の歴史の痛みを知ったうえで交流する。そうした姿勢に好感を持ちました。

一般の部の最優秀賞は遠藤伸一さんの「十年越しの感謝」。韓国は遠い国でしたが、10年ほど前、友人に誘われて大学生との交流会に参加しました。礼儀正しく積極的な若者たちは、遠藤さんが営む絨毯（じゅうたん）のクリーニング工場を見学しに来ました。「何か手伝いたい」と汗だくになって掃除もしてくれました。震災後のつらい時期でした。「人を喜ばせるすばらしい仕事ですね」という学生の温かい言葉は、今も胸に残っています。あの日以来、韓国は「大切な人たちが暮らす、かけがえのない国」になりました。交流は思いやりの積み重ね、という遠藤さんの言葉に納得しました。

出会いは偶然から始まります。一度きりの交流であっても、一生、忘れがたい出来事になることがあります。そんなとき、たとえ片言でも相手の言葉ができれば、いっぺんに壁が低くなるでしょう。「言葉が通じるのが楽しくてしょうがない」。そんな表情で、韓国の市場や食堂を回る奈緒さんの軽々とした足取りが印象的でした。

日本語エッセイ中高生・一般部門 審査評

深沢潮〔小説家〕



応募数が過去最高というのが納得できるほど、エッセイの内容が多岐に渡っていました。また、韓日交流がしっかりと根付いていることが感じられる作品を読むことができて、感慨深かったです。

みなさんそれぞれに自分にとっての大切な韓国との繋がりや文化に親しんでいることを伝えています。その愛情の一端に触れることができて、読むのが嬉しく、楽しかったです。

入賞とそれ以外を分けたのは、自分ならではのエピソードを具体的に描けているかどうか、という点が大きかったと思います。面白い題材なのに、冒頭が長くて本題を書ききれていない、あるいは、抽象的な表現に終始している、という惜しい作品もありました。

中高生部門の最優秀作、駒崎流士さんの「私の道標となった、韓国の友へ」は、文字数が制限されている中で、エピソードが過不足なく描かれ、そこから導かれた感情や気づきが、印象深く読み手の心に残るものでした。優秀作の張亜凜さんの「違いから始まる日韓交流」は、冒頭から会話で始まり、引き込まれます。会話の使い方が巧みでした。そして永井奏奈さんの「韓国料理の経験」を読んで、チーズボールが食べたくてたまらなくなりました。描写が素晴らしかったです。

一般部門に入賞・入選した作品も、みなそれぞれの味があり、優れていました。

最優秀作、遠藤伸一さんの「十年越しの感謝」は、心に響く素晴らしいエッセイでした。韓日交流とは何かを考えたとき、大文字ではなく、小文字の、こうした交流が大切であることをあらためて感じさせてくれました。温かい気持ちになりました。

優秀作の中村邦夫さんの「ソウル、再生の美学を纏う街」は、文章の秀逸さが抜きん出ていました。そして韓国と日本の美術・芸術の交差について想いを馳せ余韻に浸りました。

佐伯理奈さんの「まっすぐな正解」も、情景が目に浮かぶエッセイでした。

佳作、末吉真鳳さんの「翻訳機が訳せなかった『３秒間の空白』」が、とても印象に残っています。韓国語と日本語の翻訳について書いているエッセイは他にもありましたが、スマートフォンの翻訳アプリが訳する３秒間という短いタイムラグをモチーフに、大変うまく書かれていると思いました。応募作品は、どうしても同様の題材となってしまいますが、その人ならではの眼差しや表現力で、個性が出てきます。入賞・入選した作品は、そういった切り口があったと思います。

全体的に「もっと読みたい」と思う作品が多かったです。文字数が少ないので、詰め込みすぎてしまうと、物足りなさを感じさせてしまいます。一つの題材、モチーフ、場面、情景、思い出を丁寧に描くと良いのかもしれません。論文や説明文のようになってしまっていて、良いテーマを選んだのにもったいなく感じるものもありました。描写することを意識してみるといいかもしれません。

審査評

韓国語エッセイ中高生・一般部門 審査評

李允希〔元東京成徳大学教授〕



今年も多くのご応募をいただき、本コンテストが既に恒例の行事として定着してきたことを実感しております。応募いただいた皆様には心から感謝申し上げます。

審査においては、例年通り、単に見聞きしたことの記録にとどまらず、いかに素晴らしい表現で深い感動や切実な思いが伝わるように綴られているかに重点を置きました。

韓国語エッセイ中高生部門では、審査員全員一致で말 없는 대화（言葉のない対話）を最優秀賞に選出いたしました。日韓の生徒同士が、お互いを気遣い合いながら言葉を交わす場面を綴った作品ですが、手探りの言葉で自信なげに話す様子が、これほどまでに美しく見事に表現されていることに驚かされました。‘비눗방울처럼 부서지기 쉬워, 금방이라도 얼어붙을 것만 같았다.’（シャボン玉のように壊れやすく、すぐにでも凍り付きそうだった。）という一節は、筆者の韓国語に対する不安な心理がひしひしと伝わり、その場の空気感まで伝わってくるようでした。

また、中高生の皆さんの過去の歴史認識に対する鋭い視点に脱帽させられました。私たち大人世代よりもずっと成熟しており、この世代の皆さんがこれからの日韓や世界の平和を築いていけるのだという、確かな希望と自信を感じさせてくれました。

韓国語エッセイ一般部門の最優秀賞は、韓国の歌がきっかけで、その歌詞が知りたくて始めた韓国語の勉強について綴った作品です。‘글자를 읽고 노랫말을 이해할 때마다 나는 새 장소에 도착한 듯한 설렘을 느꼈다.’（文字を読んで歌詞を理解する度に、私は新しい場所にたどり着いたような胸のときめきを感じていた。）は新しい言語を学ぶときの達成感を素晴らしい比喩で表現していました。特に歌詞を漢語の가사ではなく、固有語の노랫말と表現したのはお見事！深い言語感覚が光ります。

また、毎年定番のテーマである김밥（キンパ）を扱った作品では、‘엄마는 걱정과 사랑을, 연인과 친구는 응원의 메시지를 넣는다. 그래서 김밥은 배보다 먼저 마음을 채워 주는가 보다.’（母は心配と愛を、恋人と友人は応援のメッセージを込める。だからキンパはお腹より先に心を満たしてくれるのだろう）という美しい表現が際立っていました。

さらに、韓国では漢方の材料にもなる梨が日本では主に果物として消費されている違いに着目した作品も秀逸でした。身近な食材を通じて日韓の文化の違いを浮き彫りにする視点が見事でした。

受賞された皆様、本当におめでとうございました。

※韓国語の表現の和訳は、ニュアンスを伝えるための直訳ベースの翻訳です。

韓国語エッセイ中高生・一般部門 審査評

南潤珍〔東京外国語大学教授〕



今年も韓国語エッセイ部門（一般・中高生）の審査を務めさせていただきました。今期の応募作は一般部門が 237 作品、中高生部門が 141 作品と、2 年連続で過去最多を更新いたしました。今年度も内容・文章構成ともに完成度の高い作品が多く、選考には大変苦慮いたしましたが、多様なテーマと斬新な構成が光る素晴らしい作品の数々に触れることができ、大変充実した時間を過ごさせていただきました。このような貴重な機会を与えてくださった韓国文化院および東京韓国教育院の皆様、そして心を込めた素晴らしい作品をご応募いただいた応募者の皆様に、心より感謝と敬意を表します。

今回は、韓国文化コンテンツ、スポーツ、韓国観光、韓国料理、日韓交流など多岐にわたるテーマでのご応募をいただきましたが、やや抽象的な主題であっても、自らの言葉で語られた個性豊かな作品が数多く見られました。選考において最も重視したのは、単に完成度が高く洗練された文章であるかということよりも、与えられたテーマをご自身の言葉で表現できているか、そして執筆者の人柄や考えが生き生きと伝わってくるかという点です。

その一方で、日本語からの直訳や単語の羅列にとどまらず、韓国語ならではの自然な表現で書くことも大切なポイントとなります。すべての作品に個別で評を寄せることは叶いませんが、全体の総評として、今年は特に「正しい敬語使用で韓国語らしい文章を書くための注意点」を一つお話しいたします。

韓国語の敬意表現は、日本語と同じく「文末の表現」と「一人称（自分を表す言葉）」の組み合わせによって作られます。文末においては、「갑니다 / 가요（行きます）」が相手への丁寧さを表すのに対し、「간다 / 가（行く）」は丁寧さを伴わないフラット、あるいはぞんざいな表現となります。一方、一人称にも区別があり、相手に対して自分を低める際には「저（私 / わたくし）」を、そうでない場合には「나（僕 / 俺 / わたし）」を使います。

ここで注意したいのが、これらの組み合わせです。「나」は丁寧な文末と不躾な文末のどちらとも組み合わせることができますが、自分を低める「저」を使う場合は、必ず丁寧な文末である「갑니다 / 가요」とセットで用いなければなりません。謙譲を表す「저」と丁寧さのない「간다 / 가」が混ざった「저는 간다 / 가」という表現は、日本語で言えば「わたくしは行くぞ」と言っているようなもので、非常に不自然な印象を与えてしまいます。

今年度の応募作の中には、大変素晴らしい内容でありながら、このような敬意表現の不一致が見られ、惜しくも選考から外れてしまった作品が数多くあり、大変口惜しく感じております。来年以降は、こうした細部にも配慮された「韓国語らしい文章」との出会いが増えることを切に願いつつ、審査の言葉とさせていただきます。

今回のコンテストへのご参加が、韓国文化や韓国語との出会いをより深め、皆様の可能性を広げるきっかけとなることを心より願っております。

審査評

韓国語エッセイ中高生・一般部門 審査評

武井一〔東京都立日比谷高等学校教員〕



中高生部門を中心に述べます。今年は、昨年より水準の高い作品が増えたように感じました。応募者数の増加も影響しているのかもしれません。どの作品も甲乙つけがたいほど素晴らしく、多くが自分の体験をもとに考えたことを丁寧に書いていました。

最優秀賞の「말 없는 대화」もその一つで、筆者の経験から得た新しい視点を提示してくれる作品でした。エッセイとしての訴求力も十分で、とくに中間部の「말은 불완전했지만 마음은 이미 닿아 있었다」が文全体を引き締めており、思わず拍手を送りたくなる出来でした。優秀賞の2作品も同様に高い完成度を備えていました。

ところで、この作文コンテストが始まって以来、日本語と韓国語をめぐる言語環境は大きく変化しました。開始当初は、翻訳しようとすると辞書かネイティヴに頼るしかありませんでしたが、機械翻訳や生成AIの登場によって、翻訳は格段に容易になりました。韓国旅行の際も、これらを活用すれば言葉の壁をあまり意識せずに済むでしょう。

しかし重要なのは、AIはあくまで「道具の一つ」にすぎないという点です。TPO（時・場所・場面）に応じて適切に使ってこそ、その力を発揮します。韓国語作文コンテストは、筆者が自分の経験から得た考えを、韓国語でどう表現するかを競う場であり、同時に韓国語の力を高めることも目的としています。

そのためには、まず自分が何を書きたいのかを明確にする必要があります。多くの人は、まず日本語で原文を作ると思いますが、この段階で内容が分かりやすいか、エッセイとして成立しているかを振り返ってほしいと思います。次に翻訳です。辞書などを使いながら、できる限り自力で文章を組み立てる努力をしてほしいと考えています。

韓国語母語話者が書くわけではない以上、どこかに日本語の影響が残ります。しかし、それで良いのです。訳そうとした努力の跡が見え、作者らしさが表れます。言い換えれば、求めているのは「完璧」ではありません。完璧に近づけてほしいのですが、「完璧に近いこと」と「完璧であること」は異なります。このような条件の中で、道具をどう使うかは、今後の課題であると感じています

日本語川柳・俳句部門

兼若逸之〔元東京女子大学教授〕



今年は酷暑、洪水、地震と大変な夏でした。日々の生活が危うくなっています。私たちの生活環境を見つめ直すことが必要な時なのかも知れません。今年も「ハングル俳句・川柳（日本語）」に多くの方が応募してくださり、心から感謝しています。その中から選ばれた優秀賞、最優秀賞の句について講評します。

優秀賞に選ばれた長谷川佳菜さんの句、「恋人と時が流れる清渓川」で詠われた清渓川（청계천：チョンゲチョン）は、ゆったりと流れる大河漢江（한강：ハンガン）とは異なり、かつてはソウルの中心部を流れる細い下水道の役割を持つ川でした。その後、川はセメントで覆われ、その下で生活水を流し、上は3・1高架道路として長く都市の交通難を解消してきました。3・1高架道路から清渓高架道路に呼称をかえて約20年後高架道路は撤去され、清渓川はソウル市民や観光客の憩いの場として生き返りました。きれいな水に足を浸したり、ゆっくり歩みを進めたり、また恋人たちが未来を語るなど、人生になくてはならない一瞬一瞬を作っています。作者自身がそうした場の主人公として時の流れに身をゆだねています。青春の一ページを切り取った優秀句です。

もう一つの優秀賞は李東映さんの「指ハート慣れぬ祖父母のえびす顔」です。照れながらも幸せそうな祖父母の表情、そしてそれを見ている作者自身の姿が見えるようです。親指と人差し指で作る小さなハートマークは若い人たちを魅了し、ついにはおじいさん、おばあさんたちにまで広がって行ったようです。祖父母の慣れぬ手つきで真似をしている姿はほほえましい限りです。暖かい家族と世代のつながりを教えてくれる句です。

最優秀賞は岸野由夏里さんの「ユンノリの一番乗りや四方の春」です。「ユンノリ」は韓国の伝統的な遊びで、サイコロの代わりに4本の短い棒状の木片（윷：ユッ）を投げ上げ、その木片の表と裏の出目の数で「すごろく」のようにゴールを目指します。日本では「樗蒲（かりうち）」と呼ばれ、古くは『万葉集』にも関連した表記があります。

岸野さんは「ユンノリ」をどのような流れですることになったのでしょうか、どこでしたのでしょうか、どのようなゲーム運びで一番乗りしたのでしょうか、いろいろと知りたくなります。チームを組めば多人数でも遊べるゲームです。自分か自分の側のコマ4つをすべてゴールインさせるには様々な紆余曲折があります。それはユンノリの独特なルールのためです。早くゴールするつもりが、上がりの直前で相手のコマに捕まってしまい、振り出しに戻されるなど人生の浮き沈みを見るような場面もあります。空中に投げられた「윷：ユッ」を見上げている民画は楽しく優雅です。万葉集の時代から現在まで続く長い長い文化交流を見ているような句で、下五の「四方（よも）の春」には強い平和への願いが読み取れます。

この他にもすばらしい句がいくつもありました。次回の応募もよろしくお願いいたします。

審査評

韓国語川柳・俳句部門 審査評

チョ・ヒチョル〔日本薬科大学（韓国薬学コース）客員教授〕



今年も例年と同じく全国各地から多くの「韓国語川柳・俳句」作品が集まりました。その数は 955 作品にも上り、特に大学生や高校生からの作品が多く見られました。

「韓国語川柳・俳句」部門にはテーマの制限を設けていませんが、多くの作品は韓国語や韓国文化を題材にしていました。応募者は韓国語だけでなく、韓国の映画やドラマ、音楽、料理など韓国文化全般に関心を持ち、学習を進めていることがうかがえました。審査員として年々韓国語川柳・俳句のレベルが上がっていることをうれしく思います。

今年「最優秀賞」に選ばれたのは、若本朋子さんの作品です。

・예불 소리에 별들도 흔들린다 해인사 새벽
（お経の音に 星も揺れている 海印寺の明け方）

この句は、韓国の三宝寺刹の一つである海印寺でテンプルステイをした思い出を詠ったようで、山寺の明け方の風景とお経の音が伝わるような気がしました。お経の音に星も揺れるという表現は聴覚と視覚をマッチさせたもので、秀句でした。

また、「優秀作」には次の作品が選ばれました。

＊濱田恵美さん
・노을진 하늘 아리랑 한 소절에 눈물 한 방울
（夕暮れに アリランの一節 涙がぽろり）
BTS のアルバムにもなっている「ARIRANG」ですが、夕暮れ時、哀調を帯びたメロディーを聴いてちょっと物悲しい思いになったのでしょうね。

＊井戸沼 亜里沙さん
・서울역 이별 부모 향한 큰절에 내 눈시울도
（ソウル駅での別れ 親に向かってのクンジョル 私の目頭も）
近年、「逆帰省」といって、帰省で大変な思いをする子どものために、地方に住む両親が子どもの住むソウルへ赴き、一緒に正月や秋夕を過ごすことが増えています。ソウル駅に見送りに来た子どもが、親との別れを惜しみ、親へ「クンジョル（ひざまずいて両手を床につき、頭を深々と下げる最大級の敬意を表すお辞儀）」をしたようです。見ているこっちまで胸が熱くなりますね。

さらに、佳作として 4 作品が選ばれました。

＊江崎定幸さん
・만 보 걸었네！ ‘센류’ 글감 찾다가 동네 열 바퀴
（１万歩歩いた 川柳の題材求めて 近所を 10 周）
川柳の題材を求めて近所を 10 周！いいですね。脳トレにもなるでしょう。

＊黄田汐音さん
・괜찮다 해도 한 번 더 권하는 것 그게 바로 정
（いいよと言われても もう一度勧めることこそが情 ）
「情」は韓国人を支える、温かい絆や思いやりの心です。慣れないと重く感じられることもあるかも知れませんが、隣の国の文化を理解し、楽しんでもらえたらと思います。

＊秋田宗志さん
・숨비 소리에 바다도 숨을 쉰다 제주의 아침
（磯笛に 海も息づく 済州島の朝）
済州島は海女さんの本場です。近年は海女さんを育てるための「海女学校」までできているようですが、海が好きな方は是非挑戦を！

＊鈴木いさ美さん
・해바라기와 키를 겨루는 아이 한여름 마당
（ヒマワリと 背比べをする子ども 真夏の庭）
ひまわりと背比べをテーマにしたこの句は、夏休みあたりの子どもの成長や夏の力強さ表現した作品で、生き生きとした夏の風景が伝わるような気がしました。

「入選」には 12 作品が選ばれましたが、上の賞に見劣りしない優秀な作品も多々ありました。 今年の応募作品も全体的に俳句的な句が多かったのですが、来年あたりは「人情を詠み、人や社会を風刺する」川柳的な句にもどんどんチャレンジしてみてください。

残念ながら今回入賞できなかった方も、ぜひ来年の大会に再挑戦してみてください。화이팅！

＜作品の日本語訳はいずれも評者による＞

受賞作品



最優秀賞

私の道標となった、韓国の友へ

駒崎 流士〔公文国際学園高等部〕

私の生まれはフィリピンです。小学校入学を機に日本へ帰国するまで、私は南国の明るい日差しの中、現地の友人たちと仲良く育ちました。しかし、私にはどうしても憂鬱になる日がありました。それはフィリピンの英雄を称える祝日などの特別な記念日です。

そのような日、子どもたちは過去に日本がフィリピンに攻め込んだ歴史を学びます。すると、普段は優しい彼らの目が変わり、日本人である私に向けて辛辣な言葉を投げかけてくるのです。当時の私はただの幼い子どもであり、誰に意地悪をしたわけでもありません。それでも歴史という大きな主語の前で、私は加害者側の国の人間として扱われました。

ある記念日のことでした。その日は今までで一番非難が激しく、大多数の子どもたちが私を囲み、言葉の刃を向けてきました。孤独と恐怖で今にも泣き出しそうになっていた、その時です。

一人の友達が私を庇うように前に立ちふさがり、皆に向かって叫びました。「こいつがやったわけじゃない。お前らは友達じゃないのか？」

その声で張り詰めた空気は一変し、私は救われました。守ってくれたのは、同じくマイノリティーとしてその場にいた韓国人の男の子でした。

驚くべきことに、彼は幼いながらも第二次世界大戦の歴史や、日韓の深い歴史的わだかまりについて私よりずっと詳しく知っていました。もし歴史の知識だけで判断していれば、彼も周囲と同調して私を非難できたはずです。あるいは、自分に火の粉が降りかかるのを恐れて傍観することもできたでしょう。しかし、彼は歴史という壁を乗り越え、目の前で泣きそうになっている私を一人の人間としてとらえ、自ら盾になってくれたのです。

あれから長い年月が経ちました。連絡手段を持たなかった私たちは、私の帰国を機に音信不通になってしまいました。それでも、彼は私の人生にとってかけがえのない友です。私が「どんな人にも偏見を持たず、公正に優しく生きよう」と誓っているのは、あの日の彼の勇気が私の道標になっているからです。

私が考える韓日交流の理想の形は、あの日の彼の中にあります。歴史を知り、受け止めた上で、国や過去という大きな主語ではなく、「私とあなた」という個人のレベルで向き合い、手を取り合うこと。それこそが、未来に向けた真の交流を生み出すと信じています。

遠く離れた空の下にいる、私の原点である友へ。いつか胸を張って再会できるよう、私はこれからも彼が教えてくれた「人として公正に向き合う優しさ」を胸に、自分の信じる形で韓日交流を紡いでいきたいと思っています。

優秀賞

違いから始まる日韓交流

張 亜凛〔富士見丘高等学校〕

「先生に敬語を使わないでいいの？」

日本の高校に入学して、私が最も驚いたことの一つだ。

先生に対し友達のように接する生徒たちを見て、今まで私が知っていた先生と生徒の関係とはずいぶん違うと感じた。

私は高校に入学するまでの 9 年間、コリアンスクールに通っていた。

そこでは先生や先輩には敬語を使い、礼儀を大切にすることが当たり前だった。丁寧な言葉を使い、きちんと挨拶をすること。それが私の学んできた「尊重」の表し方だった。

そして驚いたのはそれだけではない。日本の高校に入ってから、友達の家に遊びに行った時のことだ。

私はいつものように友達の家族と接した。

すると「韓国の子は本当に礼儀正しいんだね」と友達のお母さんからとても褒めてもらった。

普通に接しているだけでこんなにも褒めてもらえるなんて、なんだか不思議な感じがしたが、ちょっぴり誇らしい気持ちにもなった。

一方で、私自身も日本の高校で新しい「尊重」の形を学んでいる。

先生との距離が近いからこそ、分からないことをすぐに質問したり悩みを気軽に相談できる。それは礼儀がないのではなく、人との距離を縮めることで生まれる、私が知らなかった「尊重」の形なのだと気づいた。

日本と韓国には文化や考え方の違いがある。

しかし違いがあるからこそ、お互いから学べることもある。

私がコリアンスクールで学んだものを日本の人に認めてもらったように、私も日本の高校で新しい考え方を学んでいる。

日韓交流というと、どうしても国同士の対話や交流イベントのような大きなものを思い浮かべる。

しかし実際の交流はもっと身近なところから始まっているのかもしれない。

言葉遣いや挨拶、人との距離の取り方など、日常の中にある小さな違いに気づき「なぜだろう」と相手を知ろうとすること。

その積み重ねがお互いの文化を理解することにつながっていく。

私は二つの学校で過ごしたからこそ、自分にとっての当たり前が相手にとっても当たり前とは限らないことを知った。

そしてその違いは壁ではなく、自分の世界を広げてくれるものだとも感じている。

「先生に敬語を使わないでいいの？」

あの日感じた驚きも、今思えば私にとっての日韓交流の始まりだったのかもしれない。

優秀賞

韓国料理の経験

永井 奏奈〔桜花学園高等学校〕

ふわりと香る香ばしい油の匂いに誘われて、私は今年五月のある晴れた日、友人と連れ立って話題の韓国料理店へと足を運んだ。新緑が眩しい季節の心地よい風を感じながら、店内の活気ある雰囲気の中に身を置くと、胸の鼓動が少しだけ高鳴るのを感じた。その日、私たちのテーブルを最も鮮やかに彩り、そして私の食の記憶を大きく塗り替えることになった主役こそ、今や大人気の韓国グルメ「チーズボール」だった。

韓国料理といえば、チゲやサムギョプサルなど辛味や旨味が際立つ料理のイメージが強かったが、サイドメニューとして何気なく注文したその丸い揚げ物は、運ばれてきた瞬間からただ者ではない雰囲気を醸し出していた。こんがりときつね色に揚がった衣は見た目にも美しく、テーブルに置かれた瞬間にふわりと甘い香りが鼻腔をくすぐる。心なしか、粉雪のようなパウダーがほんのりとまぶされているようにも見えた。

期待と好奇心を胸に、揚げたて熱々のそれをそっと箸で持ち上げてみる。驚いたのはその感触だった。外側はカリッとしているのに、指先にはまるでお餅のように柔らかく、もっちりとした弾力が伝わってくる。一口かぶりついた瞬間、サクッという軽やかな音の直後に、外側の生地の優しい甘さが口いっぱいに広がった。まるで上質なドーナツを食べているかのような、どこか懐かしくも幸福感に満ちた甘みである。

そして、その甘さを追いかけるようにして、中から驚くほどたっぷりのモッツァレラチーズが文字通り「とろり」と姿を現した。生地を引っ張ると、チーズがどこまでも伸びていく。見た目の楽しさにも心奪われながら味わうと、今度はチーズ特有の豊かなコクと、絶妙な塩気が口の中を支配した。

この「甘い生地」と「しょっぱいチーズ」の組み合わせこそが、チーズボールの最大の魅力であり、奇跡的なまでの発明だった。甘味が塩気を引き立て、逆に塩気が甘味の余韻をすっきりと引き締める。この無限にループさせたくなる甘じょっぱいハーモニーに、私は一口食べた瞬間から完全に心を奪われてしまった。あまりの美味しさに、友人と顔を見合わせ「なにこれ、美味しすぎる……！」と思わず声をもらしてしまったほどだ。

揚げ物でありながら、甘さと塩辛さのバランスが絶妙なせいか、不思議と重たさを感じさせない。外はカリッ、中はモチッ、そして中はトロリという食感のコントラストも、一度体験したら忘れられない強烈なインパクトを残した。

あの五月の午後に味わった感動は、今でも鮮明に蘇ってくる。日常のふとした瞬間に、あの甘じょっぱさと、どこまでも伸びるチーズの温かい記憶が頭をよぎり、またすぐにでもあの韓国料理店へ駆け込みたくなってしまうのだ。チーズボールは、ただの流行りの食べ物ではなく、私にとって最高の一日を作ってくれた魔法のような一品なのである。

佳作

一滴で国境を滲ませて

宮園 凛音〔鹿児島情報高等学校〕

国境は、地図の上に引かれた一本の線だと思っていた。日本と韓国。その間には海があり、歴史があり、私には簡単には越えられない境界があるように思えた。学校の研修で韓国へ行く前、私は「日本人である自分は、韓国でどう思われるのだろう」と不安だった。けれど、実際に韓国へ足を踏み入れると、その不安は少しずつほどけていった。

出会った韓国の高校生たちは、笑顔で私たちを迎えてくれた。「日本が本当に大好き。アニメも、音楽も、全部大好き。」その言葉を聞いた瞬間、胸の奥に張りつめていた糸が、ふっとほどけた気がした。私が恐れていた「韓国人」という大きな存在は、そこにはいなかった。いたのは、笑ったり、照れたり、夢を語ったりする、一人ひとりの高校生だった。一緒に韓服を着て景福宮を歩き、明洞でトッポッキを食べた。お互いの国についてクイズをしたり、体育の授業では近くの公園を一緒に走ったりもした。日本語が話せない学生とは、英語やジェスチャー、表情を頼りに気持ちを伝えた。うまく伝わらず、顔を見合わせて笑ってしまうこともあった。そのとき、私は知った。言葉が通じることと、心が通じることは、同じではない。相手を知りたい、理解したい。そう思って向き合えば、言葉の壁の向こう側にも、人と人がつながる場所はあるのだ。

そして、別れの日が来た。「次は鹿児島で会おうな！絶対だよ！」そう言って手を振る彼らを見ながら、私は何度も手を振り返した。帰りの飛行機の中、私は「帰りたくないな」と呟いた。鹿児島の空港で家族に会ったとき、最初に口にしたのは「ただいま」ではなく、「近くの本屋に行って。」だった。気づけば私は、韓国語の参考書を手にしていた。

帰国後も私たちは連絡を取り続け、電話をしたり、プレゼントを送り合ったりした。そして私は、つたない韓国語で手紙を書いた。翻訳アプリを何度も使い、一つ一つの言葉を確かめながら、今の自分にできる精一杯の言葉を綴った。後日届いたのは、長いお礼のメッセージだった。画面いっぱいに並ぶ言葉を読みながら、海の向こうにいる彼らの気持ちが、文字になって私のもとへ届いたように感じた。韓国へ行く前、私の中にあったのは「嫌われているかもしれない」という不安だった。今、私の中にあるのは、「もっと知りたい」という気持ちだ。

国と国との違いや歴史が消えるわけではない。それでも、人と人との出会いは、心の中に引かれた境界線を少しずつ曖昧にしていく。「彼らとの出会い」という一滴が、私の中にあった国境を滲ませた。だから私は、いつかまた、その曖昧な国境を越えて、彼らに会いに行く。

佳作
韓国文化コンテンツ

西本 千晴〔仙台白百合学園高等学校〕

私は、サムルノリの音を聞いて育ってきました。

私は在日韓国人四世です。日本で生まれ育ち、日本の学校に通い、日本語で育ってきました。それ故に、韓国語を話すことはできません。家族も日本語を話します。世間で「韓国文化」と聞いて思い浮かべるようなK-POPや韓国ドラマとも、私はそれほど縁がありませんでした。ですが、一つだけ、ずっと触れていたものがあります。

サムルノリです。

장고、징、북、そして꽹과리。雨、風、雲、雷を表現したその四つの楽器は、その自然がそこにあるように、物心つく前から私のそばにありました。

父、母、その仲間たちが演奏しているのを　眺めていた幼少期。演奏する側に関わるようになった小中学時代。そして、今。四つの楽器の音を聞きながら、장고のサイズが大きくなっていくとともに、私は成長してきました。

私は、楽しそうに演奏する両親たちを見るのが好きでした。自分の生まれる前、両親やその仲間は誰に教わり、何を感じたのか。その話を聞くのが大好きでした。そして数年前、彼らの師となる方にお会いしたことがあります。私の師である彼らが、彼らの師である方の前で、嬉しそうに楽しそうに思い出話に花を咲かせていたこと、それがとてもいきいきして見えました。今は活動の時間は限られてしまっているものの、かつて憧れた人々の中で演奏することができています。日韓フェスティバルなどのステージで、サムルノリが初めての方も、見たことがある方も、一緒に演奏を楽しんでくださる姿を見るたびに胸が熱くなってます。

また、私は今、子供達に장고や북を教える母の手伝いをしています。韓国で本場のサムルノリに触れてきた子も、日本生まれで初めて挑戦する子も、何年か継続して通ってくれている子もいます。子供達の背景は様々ですが、子供同士で教え合っていたり、難しいリズムに手こずっていた子が少しずつできるようになったりするのを見ると、とても嬉しく思います。これからサムルノリを受け継いでくれるであろう子供達が、とても輝いて見えます。

私にとってサムルノリは、今と昔を繋ぐもの、世代を超えて通じていくものだと思っています。演奏する時の高揚は、父や母、その師匠達が歩んできた日々とも、どこかつながっているように感じています。それを、子供達にも感じてほしいと思っています。

私は韓国で育ったわけでも、韓国語を流暢に話せるわけでもありません。それでも、サムルノリを通して韓国文化を受け継ぎ、多くの人と分かち合うことができます。

私にとって文化を伝えることとは、特別なイベントや言葉だけで生まれるものではありません。同じ音を聴き、同じリズムを刻み、同じ笑顔を分かち合う。そういう小さなことなのだと思います。

これからも私は、この音を未来へつないでいきたいです。

佳作

オモニ

佐野 満麗那〔五ヶ瀬中等教育学校〕

2025 年の夏、初めて韓国に行った。一人で高速バスに乗り、福岡空港から仁川国際空港へと飛んだ。

空港に着き、到着ゲートを出た時、私の名前を呼ぶ大きな声が聞こえてきた。声の主は、私の父の知人のご家族だ。流暢に日本語を話すご主人のヨンホさんと、奥さんのチヨンさん、そして私と同世代の息子さんのウヨンくん。私は、その明るい歓迎に思わず笑顔になった。

コンビニでバナナウユを買ってもらい、空港をでた。駐車場へと向かう間、危ないからとチヨンさんが私の手を握ってくれていた。その優しさに胸が暖かくなった。

私には母がいない。私が 6 歳のときにがんで亡くなったからだ。それから、少し離れた祖母の家で暮らすことになった。高校生になるまでは、お母さんが当たり前にいる周りの友だちが羨ましくなることはしょっちゅうだった。特に、小学校の授業参観や部活の試合での応援。そして、なにげない会話の中で”お母さん”という単語が出ると、私の存在のせいで気まずい雰囲気にならないか、いつも内心ひやひやしていた。母が亡くなってからの約 10 年間、祖母や父、兄弟にたくさん支えてもらったが、どうしても母の温もりというものを感じることはできなかった。

チヨンさんは、私が想像するようなお母さんそのものだった。一緒にオリーブヤングに行って、おすすめのコスメを教えあい、最近の流行りについて話した。釜山に行く電車の中で上着を貸してくれた。自分のいらなくなった服や靴をたくさんくれた。漢江の横でラーメンを食べながら彼氏について話した。カフェで一緒にキーホルダーを作った。そして、思春期の息子に手を焼いている様子も、なんら日本のお母さんと変わらなかった。

ヨンホさんは、よくご飯を食べながら私の父についての話をしてくれた。父とヨンホさんは、父が若い頃初めて韓国を訪れたときに知り合ったらしい。そこからずっと交友は続いている。ヨンホさんはタブレットで昔の写真を沢山みせてくれた。中には母の写真もあった。その写真を見た時、久しぶりに母に触れた気がした。

帰国する日、チヨンさんは私を強く抱きしめてくれた。一週間という短い間だったけど、間違いなく私の人生の中で一番の旅行だった。私は韓国語が話せないし、チヨンさんも日本語が話せない。それでも、言語を超えて、心を共有することができたし、たくさんのつながりを見つけることができた。この体験から、韓国は私の中で特別な場所になった。

帰国して、父にこの旅行の話をしたとき、「チヨンさんも、娘ができたみたいで楽しかったのかもしれないね」といった。そして、私もそうだったら嬉しいなと思った。

現在、私は大学で韓国語を学ぶために受験勉強を頑張っている。韓国語が話せるようになったら、またこのご家族のもとを訪れてたくさんの話をしたい。16 歳の私が伝えられなかったこと、なにより感謝を伝えたい。

佳作

韓国文化コンテンツ

小松澤 拓登〔立教池袋高等学校〕

バンクーバーに留学したのは、高校一年生の夏のことだった。語学学校のクラスに、韓国から来た同い年の学生がいた。ルーカス、という英語のニックネームを持つ彼との出会いが、私の韓国に対する見方を静かに変えた。

出会う前から、私は「韓国のことは知っている」と思っていた。好きなK-POPグループがいたし、ドラマも何本か見ていた。食べたことのある韓国料理もある。だから、韓国人と話すことへの不安は、それほどなかった。

しかし、実際にルーカスと話してみると、戸惑うことばかりだった。

彼が笑うツボは、ドラマの主人公とは違った。好きな音楽は、私が想像していたK-POPとは全然異なるジャンルだった。受験のこと、家族のこと、将来の夢のこと。話すたびに、私が「韓国」について持っていたイメージが、少しずつほぐれていった。

ある日、私が「韓国ってドラマのイメージがあって」と言うと、ルーカスは少し笑って「俺、ドラマ全然見ないよ」と返してきた。そのひと言で、ようやく気づいた。私が知っていたのは、韓国ではなく「韓国コンテンツ」だったのだ。画面の中のキャラクターと、目の前の彼は、まったく別の存在だった。

当たり前のことかもしれない。でも、実際に誰かと話してみるまで、私はそれを理解していなかった。どれだけドラマを見ていても、K-POPを聴いていても、それだけでは「交流」にはならない。交流とは、画面の外の誰かと、言葉を交わすことなのだと、ルーカスが教えてくれた。

バンクーバーを発つ最後の日、私たちはSNSのIDを交換した。「日本に来たら連絡して」と伝えると、「行くよ、絶対」とルーカスは笑った。帰国後も時々メッセージが届く。他愛もない近況報告だけれど、そのたびにバンクーバーの夏が思い出される。

韓日交流というと、政治や歴史の文脈で語られることが多い。確かにその重みを無視することはできない。けれど、私が感じたのはもっとシンプルなことだ。ルーカスという一人の人間と話して、笑って、別れを惜しんだ。それ以上でも以下でもないその経験が、どんなコンテンツよりも鮮やかに、私の中に残っている。

知っているつもりになるのは、簡単だ。でも、本当に知るためには、画面の外に出るしかない。バンクーバーで学んだのは、英語だけではなかった。

最優秀賞

十年越しの感謝

遠藤 伸一〔福島県〕

私は福島で絨毯と布団のクリーニング業を営んでいる。十九歳で父の後を継ぎ、この仕事を始めてから三十九年。洗った絨毯は二十八万枚を超えた。

福島で生まれ育ち、この土地で暮らしてきた私にとって、韓国は遠い国だった。そんな私が、韓国の若者たちと交流したのは、今から十年ほど前のことである。

東日本大震災から数年後、韓国の大学生交流団が福島を訪れ、私は友人に誘われて交流会に参加したのだ。最初は、人見知りもあり、気が進まなかった。

ところが、実際に会ってみると、学生たちは礼儀正しく、福島のことを真剣に知ろうと次々に質問してきた。私が絨毯クリーニング業を営んでいると話すと、翌日には数人の学生が工場を見学したいとやって来た。

私は案内するだけのつもりだったが、彼らは「何か手伝いたい」と言ってくれた。そこで工場の掃除をお願いすると、蒸し暑い工場の中で汗だくになりながら、隅々まできれいにしてくれた。

それだけではない。仕事をする私に向かって、「遠藤さん、これは人を喜ばせるすばらしい仕事ですね」と身振り手振りを交えながら伝えてくれたのだ。

汚れた絨毯を洗う仕事に使命感は持っていたものの、誰かに認めてもらったことはなかった。だからこそ、その言葉は今も胸に残っている

昼休みになると、一人の女子学生が小さな鍋を抱えて現れた。中に入っていたのは、じゃがいものミルク粥。私が「有名な韓国料理ですか」と尋ねると、彼女は首を振り「私のおばあちゃんの味です」と答えた。

風邪をひいた時や元気が欲しい時、祖母が作ってくれた思い出の料理だという。「お父さまが亡くなって、一人でお仕事をしていると聞きました。遠藤さん、がんばってください」と彼女は言ってくれた。

湯気の立つ粥を一口すると、じゃがいもの甘みと牛乳の優しい味が口いっぱいに広がり、父を亡くしてから一人で抱えていた寂しさが、少し和らいだ気がした。

あれから十年。

交流とは不思議なものだ。年月が過ぎても感動は色あせず、むしろ時を重ねるほど温かさを増していく。韓国のニュースを見れば「あの学生たちは元気だろうか」と思い、工場で過ごしたあの夏の日を思い出す。

あの日以来、韓国は私にとって、大切な人たちが暮らす、かけがえのない国になった。

今年、私は勇気を出して、初めて韓国の地を訪ねてみようと思う。彼らに再会できるかは分からない。それでも市場を歩き、食堂で郷土料理を味わい、人々と言葉を交わしながら、あの日の出会いに思いを馳せたい。

韓日交流とは、国と国との関係だけではない。一人ひとりの思いやりが積み重なって生まれるものなのだ。震災後の苦しい時期に、遠い国から福島へ駆けつけてくれた韓国の若者たち。その温かな心は、十年経った今も私の中で生き続けている。

私も韓国を訪れ、あの日受け取った思いやりを、自分なりの形で返していきたい。それが、私にできる十年越しの「ありがとう」の伝え方なのだ。

優秀賞

ソウル、再生の美学を纏う街

中村 邦夫〔東京都〕

幾度、この街の土を踏んだだろうか。それでもソウルを訪れるたびに、私は「また帰ってきた」という安らぎと、初めて出会う街のようなときめきを同時に覚える。この街は静かに、しかし確かな意志を持って呼吸し、自らを変容させ続けているからだ。

私は日頃、壊れた器を漆と金で修復する「金継ぎ」という仕事に向き合っている。傷ついたものに新たな命を吹き込むその営みを通して見ると、ソウルという都市そのものが「修復」と「再生」の美学を体現しているように感じられてならない。

その象徴が「ソウル工芸博物館」だ。かつての学校を改修して生まれたこの場所では、校舎が刻んできた記憶が、現代の工芸と静かに重なり合っている。歴史を過去の遺物として消費するのではなく、丁寧に手で触れ、現在へと繋ぎとめていく。展示室で韓国の匠たちの仕事に見入りながら、私は幾度も足を止めた。国は違っても、手を動かし、素材と対話する人間の眼差しは、驚くほど似ている。ガラス越しの器が、言葉より雄弁に、海峡の向こうの作り手と私を結んでくれた。

一方で、ソウルは新しいものを受け入れることにも貪欲だ。東大門デザインプラザは異世界の息吹で街の景色を塗り替え、漢南洞では古い街並みに最先端のギャラリーが次々と新たな鼓動を打ち込んでいる。BTS の RM が美術館を巡り、その記録を分かち合う姿に触発され、若い世代は日常の延長線上にアートを見出している。日本の若者たちが K カルチャーを入口に韓国語を学び始めるように、アートもまた、人と人を結ぶ共通の言葉になりつつあるのだ。歴史を愛しながら、未来へ向かって迷いなく帆を張る。この二つのベクトルが、ソウルでは美しく共鳴している。

思えば、日本と韓国の器の縁は深い。かつて朝鮮半島から海を渡った素朴な茶碗を、日本の茶人たちは「井戸茶碗」と呼び、宝のように愛した。使い込まれてひびが入れば、金継ぎでその傷を彩り、さらに大切に使い続けた。韓国で生まれ、日本で修復され、数百年を生き続ける器。そこには、国境を越えて美を受け渡してきた両国の歴史が、静かに息づいている。金継ぎの金の線が、私にはときどき、二つの国を結ぶ航路の地図のように見える。

金継ぎの哲学において、傷は隠すべき恥ではない。傷という歴史を受け入れ、それを金で彩ることで、器は元の姿よりも深い美しさを獲得する。ソウルの街を歩いていると、この都市もまた、歴史の深い傷と誠実に向き合い、それを強靭な創造の力へ変えようとしているように思えてならない。壊れたものに執着するのではなく、変容のプロセスそのものを愛する。その寛容でタフな精神こそが、私をこの街へと惹きつけてやまない理由だ。

日本と韓国は、互いを映し出す合わせ鏡のような関係にあるのだと思う。ソウルの石畳を歩くたび、私は持ち帰るべき日本の美意識を、より鮮やかな視点で見つめ直すことができる。そして東京に戻れば、今度は韓国の友人たちに、日本の漆や金継ぎの話を聞かせたくなる。文化は、行き来を重ねるたびに磨かれていく。

二つの国のあいだにも、これまで様々なひびが刻まれてきたのかもしれない。けれど金継ぎ師の私は知っている。ひびは、丁寧に継げば、器をいっそう美しくする「景色」になるということを。修復と再生――その旅路を、海峡を越えて、これからも何度でも繰り返していきたい。

優秀賞
まっすぐな正解

佐伯 理奈〔慶應義塾大学〕

私はソウルの地下鉄が好きだ。

韓国料理やドラマ、音楽をこよなく愛する我が家にとってソウルは定番の旅行先である。母が車酔いしやすいこともあり、滞在中の移動手段はもっぱら地下鉄だ。車内アナウンスやホームでの電車到着メロディを聞くたびに「ああ、ソウルにいるんだ」と胸が高鳴る。特に印象深いのが、あのピンク色の座席だ。妊婦さんとお腹の赤ちゃんを守るための優先席は、混雑時でも空いている。「必要な人が座る場所」という意識が美しく根付いている様子に私は感銘を受けていた。

しかし、まさか私があの席に座ることになるなんて思ってもいなかった。

ある猛暑の日。晴天から突然の豪雨に見舞われ、母と私は地下鉄駅へ逃げ込んだ。折りたたみ傘では太刀打ちできず、全身はずぶ濡れになっていた。車内で迷惑にならないようにとタオルで拭ったものの、服は湿っていた。私たちと同じような状況で地下鉄に乗った人も多かったのだろう。乗り込んだ車両はラッシュアワー並みの混雑だった。私は冷房の風が直撃する場所に立ってしまい、寒さに耐えていた。「あと数駅でホテルの最寄駅だから」と自分を励ましたが、次の瞬間、視界が真っ白になった。足の力が抜け、母にもたれかかった。母が私を呼ぶ声がやけに遠くに感じた。

異変に気づいた周囲の人がすぐに私を抱き上げ、近くの席に座らせてくれた。そして、私の両手を包み込み温めてくれる手と、左肩をトントントンと優しいリズムで落ち着かせてくれる手があった。安堵のなか少しまどろみ、だんだん意識がはっきりしてきた。正面にいる母と目が合い「大丈夫？」と声をかけられた。母が前にいるのなら、私の手を温め、肩を叩いてくれているのは誰なのだろう。右を見ると年配の女性が優しい眼差しで私を見つめていた。私の左肩に置かれた手はドア横に立つ女子高生のものだった。はじめは私を抱き上げてくれた若い男性が、彼の下車後は女子高生が同じようにトントントンとしてくれていたと母から聞いた。そして、自分が座っている場所を見てハッとした。私はピンク色の座席にいたのだ。申し訳なさと感謝で胸がいっぱいになった。下車する際、拙い韓国語でお礼を言い、深く頭を下げると周りから「気にしないで」「無事で良かった」という温かい声と拍手が上がった。

ピンク色の座席は、単なるルールやマナーとして維持された場所ではなかった。あの席は「困っている人を助ける」というソウルの人々の包容力と行動力の象徴だったのだ。差し伸べてくれた手の温もりと優しさのバトン、そして、車内に満ちていた慈愛を私は決して忘れない。

私の国と私の大好きな国の間には、簡単には解きほぐせない問題や考えの違いがある。しかし、目の前の人に寄り添い、手を差し伸べるという純粋な行動は、複雑な事情を圧倒する。

ピンク色の座席を見るたび、私はあの日教えてもらったまっすぐな正解を思い出す。

佳作
またチヂミ焼くね

水島 諭子〔大阪府〕

私が韓国ドラマを好きで、どこか懐かしく感じるのは、友達の家の食卓を知っているからだと思う。
友達のお母さんは、在日コリアンの家庭で育った人だった。
でも、難しいことを話すより、「チヂミ焼けたよ」と笑うほうが似合う人だった。
その友達には知的障がいがあり、私も車椅子で生活している。お互いに、自分の気持ちをうまく言葉にできない時がある。それでも、一緒にいると安心できる、不思議な友達だった。
ある日、友達の家へ遊びに行くと、玄関を開ける前から、ごま油の香りがしていた。
「あ、今日はチヂミだ」
私はその香りだけで、なんだかうれしくなった。
「今日はいっぱい焼いたよ」
ドアを開けたお母さんが、笑いながらそう言った。
台所では、ジュウッという音を立てながらチヂミが焼かれていた。丸いフライパンの上で、生地がこんがり色づいていく。その音を聞いているだけで、お腹が空いてきた。
友達は待ちきれないように椅子へ座り、「まだ？」と何度も聞いていた。
「今焼けるから」
お母さんは笑いながら、チヂミをひっくり返した。
テーブルには、キムチやビビンバも並んでいた。小皿に入った真っ赤なキムチを見た時、私は少しだけ身構えた。
「辛かったら無理しなくていいからね」
お母さんがそう言ってくれて、私は少し安心した。
思い切って食べてみると、最初は辛かった。でも、その辛さの奥に、うま味や温かさが広がっていった。
私はそれまで、スーパーで売っているキムチは少し甘い食べ物だと思っていた。
でも、その家で食べたキムチは違った。
辛さの奥に、ごま油の香りや、手作りの料理の温かさが混ざっているような味がした。
友達は平気そうな顔でキムチを食べ、「おいしいね」と笑っていた。
見慣れない金色の箸やスプーン、棚に並ぶ韓国のりの缶、台所に置かれた大きなごま油の瓶やキムチ用の保存容器。その部屋には、韓国が自然に溶け込んでいた。
部屋の隅には、チマチョゴリを着た人たちの写真も飾られていた。
赤や黄色、緑や青。カラフルなチマチョゴリは、夕方の部屋の中で光って見えた。
「綺麗でしょう」
　お母さんはそう言いながら、写真を少しうれしそうに見つめていた。
気づけば、窓の外は夕方になっていた。
部屋の明かりに照らされた食卓は、昼間よりもさらに温かく感じた。
帰る前、お母さんが「これ持っていき」と韓国のりを持たせてくれたこともあった。
施設へ戻った後、部屋で韓国のりを開けると、ごま油の香りがふわっと広がった。
それだけで、私はまた、あの食卓へ戻ったような気持ちになった。
帰る時、玄関まで見送ってくれたお母さんが、「またチヂミ焼くね」と笑った。
外に出ると、夜に変わり始めた空気が少し冷たかった。
それでも、髪や服には、ごま油の香りがまだ残っていた。
ごま油の香りをかぐと、私は今でも、あの家へ帰りたくなる。

佳作

世界を結ぶ帯
ーブラジリアン柔術で知った「隣人」の思い出

大西 郁也〔長野県〕

私は週に数回、ブラジリアン柔術の道場に通っている。一年前、私は韓国人のキムさんに出会った。それが、私にとって初めての「隣人」との出会いだった。

柔術は「最も安全な格闘技」と言われるが、それもお互いの言葉が通じ、信頼関係があっての話だ。当時、私がメディアで目にする日韓関係は、政治の対立や国際試合での激しい衝突など、過激なニュースばかりだった。そのせいで、私の中には無意識の偏見や壁が植え付けられていたのだろう。最初に道場でキムさんを見た時、私は怖いと思った。175 センチ 73 キロの私に対し、彼は 173 センチで 100 キロを超える巨漢だ。「もし熱くなって喧嘩になったら」と、そんなことばかり考えていた。

しかし、その恐怖は初回のスパーリングで吹き飛んだ。白帯の私に対し、青帯のキムさんは体格ではなく鮮やかな技で軽々と一本を取った。そして直後、「だいじょうぶですか？」と片言の日本語で心配してくれたのだ。その瞬間、一本取られた悔しさよりも、ニュースのレッテルを相手に貼り付けていた自分への恥ずかしさが込み上げた。私は初めて「韓国人」という主語ではなく、「キムさん」という一人の人間と繋がった。

それからは練習後、翻訳アプリを挟んで会話を重ねた。彼は日本と韓国の半導体の貿易に関係する仕事をしていた。彼はよく「私は社会のスレイブ」「飛行機、狭いです。」と仕事の不満や大変さを笑いながら口にしていた。彼の背景を知るにつれ心の壁は消え去り、文化の違いや強くなるためのアドバイスを教わる時間は本当に楽しかった。

特に忘れられないのは年齢の話題だ。周囲から大人びていると言われる私に、キムさんは「あなたは今、30 何歳ですか？」と聞いた。私が慌てて「エイティーン！」と返すと、彼は目を見開いて驚き、アプリの画面を差し出してきた。そこには『18 歳なら大丈夫です。明るい未来があります』と真面目なトーンで書かれていた。まさか彼からも 30 代に見えていたとはおかしくて、二人で笑いあった。

画面の文字の奥にある温かい人柄に触れ、私たちは国籍も年齢も越えた「ただの友人」になった。だからこそ、仕事の都合による彼の突然の帰国は本当に寂しかった。私はキムさんと出会い、メディアのステレオタイプではなく、目の前の一人と向き合う大切さを知った。

彼が去った後、私も青帯になった。この帯を結んで畳の上に立ち続ければ、いつかまた彼に会える気がしている。その時は、翻訳アプリを使わずに、もっとたくさんの言葉を交わしたい。

佳作

翻訳機が訳せなかった「３秒間の空白」

末吉 真凰〔早稲田大学〕

「こんにちは」と吹き込み、スマートフォンの画面を見せる。彼が頷き、韓国語で返し、私が画面を読む。2024 年の夏、広島市と大邱広域市の青少年交流事業で出会った同世代の彼との会話には、いつも翻訳アプリによる「３秒間のタイムラグ」が存在した。 そのわずかな空白の時間はもどかしく、どこか日本と韓国という二つの国の間に横たわる、見えない距離そのもののように感じられた。私は、この画面越しでしか言葉を交わせない関係で、果たして「交流」と呼べるようなものを築けるのかと、内心不安を抱いていた。

その距離感が劇的に変わったのは、共に広島平和記念資料館を訪れた日のことだ。被爆地・広島の若者として彼を案内することに、私は少なからず緊張していた。歴史的な背景もあり、彼が展示を見てどう感じるのか、どんな言葉を投げかけられるのか。私は、すぐにでも翻訳アプリを差し出せるよう、スマートフォンを強く握りしめながら彼と並んで歩いた。

しかし、その日、私たちが画面を覗き込むことは一度もなかった。 凄惨な被害を伝える展示の数々を前に、彼はただ無言で立ち尽くしていた。その真剣で、どこか悲痛さを帯びた眼差しを見た瞬間、私は彼が何を感じているのかをはっきりと理解した。そこにあったのは、国籍も歴史的背景も関係ない、同じ人間として他者の痛みを想像し、平和を希求する純粋な祈りだった。言葉の壁も、翻訳のタイムラグも存在しない、深く雄弁な「沈黙」を、私たちは共有していた。

資料館を出た後、不思議なことに、私たちの間からあの「３秒間の空白」は消えていた。 もちろん、急に言葉が通じるようになったわけではない。しかし、昼食でお好み焼きを頬張りながら顔を見合わせて笑った時も、移動中のバスの中で身振り手振りで好きなものの話をした時も、わざわざ翻訳機を通さなくても、彼の感情がダイレクトに伝わってくるようになったのだ。画面を介さず、互いの目を見て笑い合えた時、私は初めて彼と本当の意味で出会えた気がした。

私が考える日韓交流とは、決して大げさなものではない。翻訳機を通した表面的な言葉のやり取りではなく、同じ空間で同じものを見て、心の内側にある感情を分かち合うこと。そのリアルな経験の積み重ねなのだと思う。 現在、彼とは SNS で時折連絡を取り合っている。そこには相変わらず翻訳機能が使われているが、私の心の中にもうあの「３秒間の距離」はない。いつかまた再会し、今度は翻訳機なしで笑い合える日を目標に、私は彼とのこの確かな関係を大切にしていきたい。

佳作

実家の本棚にあった韓国

淺田 雅人〔京都府〕

実家の本棚に、『ソリちゃんのチュソク』という絵本がある。子どもたちが小さかったころ、帰省するたびに「読んで」と言うので、私が昔使っていた部屋のベッドの枕元に置いて、何度も読んだ。

韓服の色、親戚が集まる食卓、お墓に向かう家族の姿。ページをめくりながら、私は「チュソクっていうのはね、韓国で毎年、ご先祖様にご挨拶する行事なんだって」と説明していた。でも本当は、説明している私の方が、いつも少し立ち止まっていた。知らない行事のはずなのに、お盆や正月の空気に似ている。けれど、やっぱりどこか同じではない。その近さと違いが、絵本の中に静かに並んでいた。

私には、会ったことのない祖父がいる。家族から、韓国の人だったらしいと聞いている。「らしい」としか言えないのは、私がその人の声も顔も知らないからだ。父からも詳しい話は聞けないまま、父は他界した。祖父の話を聞いたからといって、急に韓国が自分の故郷になったわけではない。けれど、まったく関係のない外国とも思えなくなった。近いと言い切るには知らなすぎて、遠いと言うには、少しだけ家の中に入り込んでいる。私にとって韓国は、そんな距離の場所だった。だから韓国へ行くなら、観光名所を急いで回るより、普通の人の暮らしが見える場所を歩いてみたい。市場の朝、住宅街の坂道、子どもが本を読んでもらう部屋。チュソクの日に家族が集まる空気を、できることなら見てみたい。日本と似ているところにほっとするかもしれないし、思ったより違うなと戸惑うかもしれない。どちらかだけではなく、その両方を見てみたい。

子どもに絵本を読んでいたとき、「これってお盆みたいなもの？」と聞かれたことがある。私は少し考えて、「そうだね。似ているところもあるし、同じでもないみたいだね」と答えた。うまい説明ではなかった。でも、今もその答えがいちばん正直だった気がする。

韓日交流という言葉は、時々とても大きく聞こえる。けれど私の中の始まりは、一冊の絵本と、会ったことのない祖父の話だった。まだ知らないことの方が多い。だからこそ、いつか韓国を歩くときは、自分に都合よく近づけるのではなく、似ているものの前で少しほっとして、違うものの前で少し黙ってみたい。私にとっての韓国は、たぶん、そこから少しずつ始まっていく。

最優秀賞
말 없는 대화

平田 大葵〔群馬県立中央中等教育学校〕

똑바로, 그저 똑바로. 그의 눈에는 분명히 내가 비쳐 있었을 것이다. 그의 이름도, 목소리도, 옷차림도 이제는 기억나지 않는다. 하지만 그 시선만은 선명하게 남아 있다.

말은 올바르게 해야 한다고 믿었다. 문법이나 발음을 틀리면 웃음거리가 된다는 생각에, 어느새 나는 말하는 것이 두려워졌다. 그날도 나는 올바른 말을 찾기 위해 필사적이었다.

겨울. 나는 교류회에서 만난 한국인 그와 도쿄 거리를 걸었다. 어두워진 하늘과 도시의 소음 속에서, 일본어를 거의 못하는 그와 한국어가 서툰 나는 충분한 대화 없이 걷고 있었다. 내 한국어는 비눗방울처럼 부서지기 쉬워, 금방이라도 얼어붙을 것만 같았다. 그래도 전하고 싶은 마음에 막 배운 한국어를 꺼냈다. “이 가게, 예쁘네.”

그는 잠시 생각하더니 막 배운 일본어로 답했다. “……ダイジョウブだよ.” 나를 다시 바라보는그의 눈빛은 정말 따뜻했다. 하지만, 긴장이 풀림과 동시에 차가운 몸에 갑자기 뜨거운 물을 부은 듯한 찌릿한 통증이 느껴졌다. 올바른 말에 집착하느라 진정한 온기에서 멀어져 있었던 나에 대한 후회의 아픔이었다.

말은 불완전했지만 마음은 이미 닿아 있었다.

그는 내 서툰 말을 끊지 않고 기다려 주었다. 문득 깨달았다. 그의 눈은 내 입술이 아니라 더 깊은 곳을 바라보고 있었다. 내가 말을 찾다 막히더라도 그의 눈빛은 흔들리지 않았다. 문법은 무너졌을지언정 대화는 깨지지 않았다. 얼어붙기 직전의 비눗방울을 그의 마음이 온기로 감싸주었기 때문이다. 말이 서툴수록 거리는 점점 가까워졌다. 어느새 시선과 미소만으로도 우리는 이어져 있었다.

겨울은 모든 것을 얼리는 계절이라 믿었지만, 그날 얼지 않는 것이 있었다. 불완전한 내게 미소 지어준 그 순간의 따뜻함. 말보다 마음이 먼저 닿았던 것이다.

말은 완벽하지 않아도 괜찮을지도 모른다. 전하고 싶다는 마음이 앞선 순간, 말은 제 역할을 다한지도 모른다. 이제 나는 두렵지 않다. 한국어를 배우는 이유는 완벽한 문장을 구사하기 위해서가 아니라, 마음을 내어줄 용기를 갖기 위해서다. 나아가 누군가의 침묵 속 미완성된 마음까지 서두르지 않고 받아들일 수 있는 사람이 되고 싶다.

똑바로, 그저 똑바로. 그의 눈에는 분명히 내 ‘마음’ 이 비쳐 있었을 것이다. 우리를 이어준 것은 말이 아닌 교차하는 시선과 미소, 바로 말 없는 대화였다.

優秀賞

평화를 만들어 갈 수 있는 사람

坪井 杏佳〔盈進高等学校〕

“해외에 학교 교류를 하는 것은 처음이었지만, 네 덕분에 멋진 추억이 되었어.” 이 말은 올해 7월, 한국 학생들과 교류했을 때 친해진 한국 친구에게 들은 말입니다. 저는 이 말을 듣고 진심으로 기뻤습니다. 그리고 나라와 언어가 달라도 서로를 이해하려는 노력이 얼마나 중요한지 다시 한번 느낄 수 있었습니다.

저는 중학생 때부터 국제교류 동아리에서 활동하며 한국 학생들과 꾸준히 교류해 왔습니다. 하지만 올해 교류는 이전과는 조금 다른 경험이었습니다. 지금까지의 교류에서는 주로 서로의 문화를 소개하고, 문화의 차이에 대해 이야기하며 서로를 이해해 왔습니다. 각자의 문화를 나누면서 시야를 넓힐 수 있었고, 서로를 더 가까이 느낄 수 있었습니다.

하지만 이번 교류의 주제는 문화가 아니라 ‘평화’ 였습니다. 먼저 각 학교에서 어떤 평화교육을 하고 있는지 발표한 뒤, 조별로 평화와 역사에 대해 이야기를 나누었습니다. 평소처럼 학교생활에 대해 이야기할 때는 자연스럽게 대화가 이어졌습니다. 하지만 평화와 역사에 관한 이야기가 시작되자 모두가 조심스러워졌고, 쉽게 말을 꺼내지 못했습니다. 일본과 한국 사이에는 과거의 역사가 있고, 모두 그 사실을 의식하고 있었기 때문이라고 생각합니다.

저는 지금까지 오키나와 수학여행에서 평화기념비 앞에서 대표 연설을 한 적도 있고, 히로시마도 여러 번 방문하면서 다른 사람들보다 평화에 대해 많이 배웠다고 생각했습니다. 또한 일본과 한국의 역사에 대해서도 동아리 활동을 통해 조금 공부했습니다. 그런데 막상 한국 친구들 앞에 서니 말이 쉽게 나오지 않았습니다. 평소의 이야기라면 자연스럽게 할 수 있었지만, 평화에 대해서는 제 생각을 제대로 전하지 못했습니다. 서로 다른 입장을 가진 사람과 함께 역사와 평화를 이야기하는 것이 얼마나 어려운 일인지 처음으로 깨달았습니다.

교류가 끝난 뒤 지도 선생님께서 해 주신 말씀이 지금도 기억에 남습니다.

“전쟁의 책임은 지금을 살아가는 우리에게 있는 것이 아니다. 하지만 과거에 어떤 일이 있었는지를 아는 책임은 우리에게 있다.”

저도 과거의 역사에 대한 책임이 제게 있다고는 생각하지 않습니다. 하지만 그 역사를 모른다면 같은 실수를 반복할 수도 있습니다. 그렇기 때문에 과거를 배우고, 그 배움을 미래로 이어 가는 것이 중요하다고 생각하게 되었습니다.

이번 교류를 통해 저는 문화와 언어뿐만 아니라 역사와 평화에 대해서도 깊이 생각할 수 있었습니다. 그리고 서로를 이해하려는 노력, 그리고 과거의 역사에서 눈을 돌리지 않고 계속 배우려는 자세가 미래의 평화로 이어진다는 것을 느꼈습니다. 한국 친구가 제게 “네 덕분이야.” 라고 말해 준 한마디는 저에게 큰 용기를 주었습니다. 저는 앞으로도 한국 친구들과 계속 대화를 이어 가며, 서로를 이해하고 함께 평화를 만들어 갈 수 있는 사람이 되고 싶습니다.

優秀賞

소중한 존재

吉田 光誠〔青山学院高等部〕

여러분에게 “소중한 존재” 란 어떤 것일까. 나에게 소중한 존재가 누구인지 깨닫게 된 계기는, 일본어에는 없는 평소 무심코 나누던 대화 속에서 사용한 한국어였다.

나는 일본인 아버지와 한국인 어머니 사이에서 태어났다. 그래서 어머니나 할머니와는 한국어로 대화한다. 내가 초등학생이었을 때, 할머니와 이야기하다가 “우리 엄마가” 라는 말이 나왔다. 이 말은 일본어로 “내 엄마가” 라는 뜻이 된다. 하지만 직역하면 “우리 엄마가” 라는 뜻이 된다. 이 “우리” 라는 말에는 “나의” 라는 것이 아니라 “우리” 라는, 일본어로는 다 표현할 수 없는 상대를 소중히 여기는 마음과 다정함이 담겨 있는 것처럼 느껴졌다. 그리고 나는 이 말을 계기로, 평소 당연하게 여기던 가족의 존재가 나에게는 소중한 존재라는 것을 깨닫게 되었다.

나는 매년 여름이 되면 한국에 있는 외가댁을 방문한다. 그곳에서 친척이나 할머니 친구들을 만나는데, 한국에서는 처음 만나는 사람이라도 친근하게 대해주는 사람이 많다. 처음 만난 나에게 김밥을 나눠주거나, 가게에서도 친근하게 말을 걸어주기도 한다. 그런 경험을 할 때마다 사람의 따뜻함을 느끼고 마음이 행복해진다. 일본에서는 모르는 사람에게 말을 걸기가 조금 꺼려질 때도 있지만, 한국에서는 모르는 사람이라도 편하게 다가간다.

또한 농경사회였던 한국에는 예로부터 지역 사회나 가족끼리 서로 돕는 문화가 있다. 농업이 번성하던 시절에는 혼자서 하기 어려운 일을 마을 사람들이 협력했다고 한다. 식사할 때도 각자 따로 먹는 것이 아니라, 큰 접시에 음식을 담아 모두 함께 나누어 먹는다. 가족이 모두 모여 식탁을 둘러싸고, 음식을 나누며 이야기를 나누는 시간에는 사람과 사람 사이의 유대를 소중히 여기는 한국 문화가 드러나 있다고 생각한다.

소중한 존재는 항상 곁에 있기 때문에 당연하게 여기게 되어, 그 소중함을 깨닫지 못할 때가 있다. “우리 엄마가” 라는 무심코 내뱉은 한마디는, 평소 당연하게 여기던 가족과 주변 사람들과의 유대감을 깨닫게 해주었다. 이 소중한 존재는「우리」라는 한국어가 없었다면 깨닫지 못했을 것이다.

앞으로 가족과 보내는 시간이 줄거나, 새로운 인간관계 등 주변 환경이 변화하는 일도 있을 것으로 생각한다. 그런 와중에도 언어나 문화가 달라도 상대를 배려하는 마음은 전해진다는 사실을, 일본과 한국, 두 가지 문화를 접해 왔기에 더욱 소중히 여기고 싶다. 그리고 나 자신도 누군가가 당연하게 여기는 일상 속에 있는 작은 친절을 소중히 여기며, 주변 사람들에게 따뜻한 마음을 전할 수 있는 존재가 되고 싶다.

佳作

천 킬로 너머의 " 처음 뵙겠습니다 "

最上 和香〔大仙市立大曲南中学校〕

천 킬로 떨어진 곳에, 나와 유행이나 고민을 공유할 수 있는 또래 여학생이 있다.

뉴스나 교과서 속에서는 줄곧 ' 가깝고도 먼 소원한 존재 ' 였던 장소가, 편지 앱을 계기로 지금은 소중한 친구가 살고 있는 ' 멀고도 가까운 친근한 존재 ' 로 바뀌었다.

TV 를 켜면 뉴스에서는 복잡한 한일 관계나 사회 정세가 흘러나온다. 하지만 SNS 에 올라오는 한국 또래 아이들의 게시물을 보면, 우리처럼 고민하며 일상을 보내고 있다.

' 미디어라는 필터를 벗겨낸 진짜 한국의 또래들은 어떤 생활을 하고 있을까 ' 라는 궁금증과 호기심으로 " 처음 뵙겠습니다 " 로 이어지는 버튼을 눌렀다.

나는 처음 보는 사람 앞에서 낯을 가리지 않는 성격이지만, 언어의 장벽이 있는 상태에서의 첫 주고받음은 긴장됐다. ' 오타가 있으면 어쩌지 ', ' 상대방에게 이상한 뉘앙스로 전달되면 어쩌지 ' 하고 불안해하며 몇 번이나 다시 읽었다.

편지를 보내기 전까지는 전에 없던 긴장감과 초조함이 있었던 것 같다. 편지를 보내고 나서 답장이 오기까지는 생각보다 빠랐다. 답장을 보니 나의 불안을 순식간에 날려 버릴 만큼 매우 친근한 답변이었고, 언어의 장벽 같은 것은 느껴지지 않았다. 그때부터의 주고받음은, 아직 한 번밖에 편지를 주고받지 않았다고는 믿기지 않을 정도의 내용이었다. 둘 다 반말로 서로를 애칭으로 부르며, 일상적인 학교 생활이나 공부 고민, 소소한 오늘 일상 이야기까지. 특히 심금에 깊이 남는 추억이 있다. 내가 좋아하는 일본 아이돌을 소개했더니, " 이 노래 진짜 좋다 ", " 이 멤버 너무 귀엽다 !" 라며 예상외로 푹 빠져 준 일이다.

가슴이 설레고 ' 좋아한다 ' 는 마음이 겹쳐진 그 순간은 엄청나게 인상 깊게 남아 있다.

실제로 말을 주고받으며 느꼈던 것은, 언어나 문화가 달라도 우리는 ' 같은 시대를 살아가는 또래 ' 라는 점이었다.

확실히 자란 환경이나 문화가 달라서 서로 놀라는 일도 있다. 하지만 그것은 일본인끼리도 마찬가지다. 뉴스가 전달하는 정보만이 그 나라와 사람들의 전부가 아니다. 직접 겪어봐야 비로소 ' 리얼한 모습 ' 이 보인다. 그것을 그녀가 가르쳐 주었다.

천 킬로 떨어진 곳에 사는 그녀와 직접 만나 " 처음 뵙겠습니다 " 하고 웃는 얼굴로 손을 흔들며 인사하는 것이 우리의 꿈이다.

이제는 일상에 빠질 수 없는 스마트폰으로 시작된, 바다를 건넌 친구와의 편지를 앞으로도 소중히 지켜나가며, 서로의 세계를 넓혀 갈 수 있는 관계를 만들어 가고 싶다. 그리고 우리와 같은 일대일 교류가 쌓이는 것이, 앞으로의 한일 양국을 더욱 가깝고 따뜻한 것으로 바꿔갈 것이라 믿는다.

佳作

국경의 섬에서 배운 성신 (誠信)

藏森 志乃〔長崎県立対馬高等学校〕

저는 지금 '국경의 섬' 이라고 불리는 쓰시마의 고등학교에서 한국어를 배우고 있습니다 .

일본에서 한국과 가장 가까운 이 섬에는 매일 많은 한국인 관광객이 찾아오고 , 거리에는 일본어와 한글이 함께 적힌 간판이 늘어서 있습니다 . 이러한 환경에서 생활한 지도 어느덧 2 년째가 되었습니다 . 그러던 어느 날 저는 "언어와 문화의 장벽이 있었던 옛날의 일본과 한국은 어떻게 교류를 이어 나갔을까 ?" 라는 의문을 품게 되었습니다 .

그 무렵 학교 행사로 조선통신사역사관을 방문했고 , 그곳에서 일본과 조선의 교류에 크게 공헌한 아메노모리 호슈 (雨森芳洲) 선생님을 알게 되었습니다 .

호슈 선생님은 1668 년 지금의 시가현에서 태어나 22 살에 쓰시마번에 들어갔습니다 . 30 대에는 부산 왜관에서 약 3 년 동안 조선어와 문화를 배우고 , 귀국 후에는 조선통신사를 맞이하며 통역을 맡았습니다 . 또한 '한어사 (韓語司)' 의 발전에도 힘쓰며 통역관 양성에 크게 기여했습니다 .

하지만 제가 가장 깊은 인상을 받은 것은 업적이 아니라 '성신 (誠信)' 이라는 가르침이었습니다 .

성신은 '서로 속이지 않고 다투지 않으며 , 진심으로 상대를 대하고 서로를 믿는 것' 을 뜻합니다 . 호슈 선생님은 외교에서 가장 중요한 것은 자신의 이익이 아니라 상대를 존중하는 마음이라고 생각했습니다 . 그리고 직접 조선어를 배우고 문화와 예절을 이해하려 노력하며 그 가르침을 몸소 실천했습니다 .

약 300 년 전 , 외국과의 교류가 쉽지 않았던 시대에 언어뿐 아니라 문화와 가치관까지 이해하려 했던 그의 모습은 저에게 큰 감동을 주었습니다 .

그리고 저는 스스로에게 물었습니다 .

'나는 정말 성신의 마음으로 한국어를 배우고 있는가 ?'

지금은 스마트폰만 있어도 외국의 정보를 쉽게 얻을 수 있고 , 번역 앱으로 대화도 할 수 있습니다 . 하지만 그것만으로 상대를 이해했다고 말할 수 있을까요 ? 저는 한국어를 배우는 것에만 만족한 채 , 그 언어의 배경이 되는 역사와 문화 , 사람들의 생각을 알려고 노력했는지 돌아보았습니다 . 솔직히 자신 있게 '그렇다' 고 대답할 수는 없었습니다 .

그래서 저에게 '성신지교 (誠信之交)' 는 한국어를 배우는 의미가 되었습니다 .

앞으로도 저는 한국어를 계속 배우겠습니다 . 하지만 배우고 싶은 것은 언어만이 아닙니다 . 상대의 문화와 역사 , 가치관을 이해하려는 마음을 잊지 않고 진심으로 사람을 대하는 사람이 되고 싶습니다 . 국경의 섬 쓰시마에서 배우는 학생으로서 , 아메노모리 호슈 선생님의 성신의 마음을 이어받아 미래의 한일 교류에 기여하고 싶습니다 .

佳作

나의 일상은 당신의 특별

坂入 優奈〔玉川聖学院高等部〕

나는 고등학교 교환학생 프로그램을 통해 자매학교에 다니는 한국 학생들을 만났다. 평일에는 학교에서 함께 수업을 듣고 도시락을 먹기도 했고, 공휴일에는 학교를 벗어나 테마파크에서 놀거나 쇼핑을 하는 등 많은 추억을 만들었다.

수많은 추억 중에서도 특히 인상 깊게 남아 있는 일이 있다. 테마파크에서 돌아오는 길, 버스 안에서 수다를 떨고 있을 때, 갑자기 한국 친구가 "일본은 정말 예쁘네" 라고 말하는 것을 듣고 깜짝 놀랐다. 지금 버스가 달리고 있는 곳은 평범한 고속도로였고, 관광 명소가 보이는 것도 아니어서 나에게는 특별한 특징 없는 소박한 풍경으로 느껴졌다. 나는 무심코 그 자리에서 "이게 예쁘다고 생각해?" 라고 말했다. 그러자 한국 친구는 "응. 정말 예뻐. 일본은 어디를 가도 예뻐." 라고 미소 지으며 대답했다. 일본의 평범한 풍경을 보고 '예쁘다' 고 느끼며, 그 마음을 일본에 사는 우리에게 솔직하게 전해 준 한국 친구들 덕분에, 지금까지 미처 깨닫지 못했던 우리 주변의 아름다움에 눈을 돌릴 수 있게 되었다.

약 2 개월이 지난 봄방학에, 이번에는 내가 한국을 방문했다. 홈스테이를 한 친구의 집에서는 친구 가족들이 따뜻하게 맞아주었다. 식탁을 둘러앉아 식사를 하거나, TV를 보며 대화를 나누는 등, 관광만으로는 맛볼 수 없는 한국의 소소한 일상을 경험할 수 있었다. 친구에게는 평범한 일상일지 모르지만, 나에게는 마음이 따뜻해지는 그 무엇과도 바꿀 수 없는 소중한 시간이었다. 명동이나 성수동 등 사진으로만 봤던 거리 풍경이 눈앞에 펼쳐지자, 나는 무심코 "예쁘다" 라고 말했다. 그 말을 들은 한국 친구는 처음에는 고개를 갸웃거리며 의아해했지만, 점차 "확실히 예쁠지도 모르겠네." 라고 공감해 주었다. 그리고 "일본에서도 비슷한 대화를 나눴었지." 라며 서로 웃음을 터뜨렸다.

이 경험을 통해, 내가 당연하다고 생각하는 것이 누군가에게는 특별하고 아름다운 것일 수 있다는 사실을 깨달았다. 한일 교류는 서로의 나라 문화를 알아가는 것뿐만 아니라, 상대방의 관점에 서서 자신의 나라와 당연하게 여기는 일상 속에 숨겨진 가치를 재발견할 수 있다는 점에도 매력이 있다고 느꼈다. 서로 다른 가치관을 접하고 이를 공유함으로써 혼자서는 깨닫지 못했던 아름다움과 매력을 발견할 수 있으며, 그것들은 우리의 '당연함' 을 소중한 것으로 바꿔준다. 이처럼 서로의 관점을 통해 새로운 가치를 만날 수 있다는 점이야말로 한일 교류의 중요한 의의라고 생각한다.

佳作

보이지 않는 노력

長田 莉桜奈〔光塩女子学院高等科〕

초등학교 4 학년, 우연히 접한 K-POP 을 계기로 한국에 관심을 갖기 시작한 지 어느덧 7 년이 되었다. TWICE 의 'TT' 가 일본에서 큰 인기를 끌던 당시, 나는 화면 속 K-POP 아이돌의 모습에 매료되었다.

당시 나에게 K-POP 은 화려한 세계였다. 음악 방송에서는 화려한 무대가 펼쳐지고, 반짝이는 의상을 입은 아이돌들이 완벽한 퍼포먼스를 선보였다. 나는 그런 모습을 반복해서 보면서 그것이 K-POP 이라는 세계의 '당연한 모습' 이라고 생각하게 되었다.

K-POP 을 계기로 한국어를 배우기 시작했고, 한국 드라마와 다양한 콘텐츠도 접하게 되었다. 한국에 대해 알아가는 시간이 늘어날수록 나는 처음에는 보이지 않았던 것들을 조금씩 발견하게 되었다. 그것은 화려한 세계를 뒷받침하는 '보이지 않는 노력' 이었다. 그러한 생각을 하게 된 계기 중 하나가 RESCENE 의 콘텐츠 '뿌리를 찾아서' 였다. 그 콘텐츠에서 한 멤버가 초등학생 때부터 학교와 댄스 학원을 매일 오가느라 학창 시절의 추억이 별로 없다고 이야기했다. 그 말을 듣고 나는 처음으로 아이돌에게도 우리와 같은 '학창 시절' 이 있다는 사실을 실감했다.

또한 K-POP 아이돌 중에는 연예 활동에 전념하기 위해 학업을 중단하고 검정고시 등으로 학력을 취득하는 길을 선택하는 사람들도 있다. 무대 위에서 완벽한 퍼포먼스를 선보이는 모습 뒤에는 어린 시절부터 이어 온 노력과 데뷔를 둘러싼 경쟁, 그리고 꿈을 위해 무언가를 포기해야 하는 선택이 있다는 것을 알게 되었다.

이러한 '노력과 경쟁' 이라는 관점으로 한국 콘텐츠를 바라보게 되면서, 나는 드라마《SKY 캐슬》도 이전과는 다른 시선으로 보게 되었다. 자녀들의 진학을 둘러싼 치열한 경쟁을 그린 이 작품에서 나는 '남들보다 더 노력하고 한정된 기회를 두고 경쟁한다' 는 점에서 K-POP 과의 공통점을 느꼈다.

그리고 RESCENE 의 활동을 지켜보면서 소속사 규모에 따라 활동 환경에도 차이가 있다는 사실을 알게 되었다. 나는 그동안 대형 기획사 소속 아이돌을 주로 봐왔기 때문에 음악 방송에서 화려한 무대가 펼쳐지는 것을 당연하게 여겼다. 하지만 RESCENE 을 통해 중소 기획사 소속 아이돌들이 반드시 같은 환경에서 활동할 수 있는 것은 아니라는 점을 깨달았다. 내가 당연하다고 생각했던 K-POP 의 모습은 결코 모든 아이돌에게 당연한 것이 아니었던 것이다.

7 년 전, 화면 속 K-POP 아이돌의 모습에 매료되었던 나는 이제 그 빛이 어떻게 만들어지는지를 생각하게 되었다.

앞으로도 나는 한국의 화려한 문화를 즐기는 데 그치지 않고, 그 이면에 있는 사람들과 사회에도 관심을 가지며 나만의 시선으로 한국이라는 나라를 알아가고 싶다.

最優秀賞

한글이라는 길을 따라가는 나의 여행

清水 理愛〔帝塚山学院大学〕

“아침은 다시 올 거야. 어떤 어둠도 어떤 계절도 영원할 순 없으니까.”

중학교 1학년 때 들은「봄날」속 이 구절은 나와 한국을 처음 이어 준 말이다. 가사의 뜻을 찾아보다가 이 노래가 그리움만이 아니라 긴 겨울을 지나 다시 봄을 기다리는 희망을 의미한다는 것을 알게 되었다. 낯설었던 한글이 마음속으로 서서히 들어왔다.
비행기를 타고 떠나는 여행은 아니었지만 나의 한국 여행은 이렇게 시작됐다. 가사를 이해하고 싶은 마음이 첫걸음이 됐다. 글자를 읽고 노랫말을 이해할 때마다 나는 새 장소에 도착한 듯한 설렘을 느꼈다. 한글은 단순한 문자가 아니라 한국으로 향하는 길이었던 걸까?

슬프게도 그 길이 언제나 밝기만 했던 건 아니다. 대학교 1학년 생활이 평화롭게 끝나갈 무렵, 나는 소중한 가족을 떠나보내야 했다. 학교에 가는 것조차 힘들었고 한국어 교재에도 손이 가지 않았다. 케이팝도 잊고 살았다. ‘계속할 수 있을까?’라는 생각이 마음을 무겁게 했다.

그러던 어느 날, 어머니와 장을 보고 돌아오다 어느 음식점 앞을 지났다. 차가운 공기 속으로 따뜻한 음식 냄새가 새어 나오길래 나도 모르게 간판을 올려다보았다. “어! 한국 음식점이네!“ 자연스럽게 눈에 들어온 한글은 나에게 어떤 깨달음을 줬다. 내 안의 한국어는 멈춘 것이 아니라 휴화산처럼 조용히 숨 쉬고 있었다는 것을.

도종환 시인의「흔들리며 피는 꽃」에는 “흔들리지 않고 피는 꽃이 어디 있으랴”라는 구절이 있다. 꽃만 그런 것은 아닐 것이다. 사람도 흔들리며 자라듯, 나 역시 그 시기에는 많이 흔들렸다. 아무렇지 않은 척 학교에 가려 해도 마음은 쉽게 따라오지 않았다. 그 흔들림 속에서 내가 소중하게 여겼던 것을 다시 떠올리게 해 준 것은 우연히 마주한 한글 몇 글자였다.

나는 아직 한국을 방문해 본 적이 없는데도 돌이켜 보면 이미 나만의 방식으로 한국에 다가가고 있었다. ‘천 리 길도 한 걸음부터’라는 말처럼 나의 한국 여행도 가사를 알고 싶다는 작은 호기심에서 시작됐다. 그 작은 한 걸음은 한글을 배우도록 길을 터 줬고 한국은 멀기만 한 나라가 아니게 됐다.

한글 사랑은 한때 겨울날처럼 얼어붙기도 했지만, 가게 간판의 한글을 읽은 그 순간 다시 봄날을 만났다. 나는 다시 한국어 교재를 펼쳤다. 다시 천천히 한 줄씩 읽기 시작했다. 모르는 단어가 많아 한숨이 나올 때도 있지만 이제는 안다. 이 길은 슬픔 속에서도 내가 다시 걸어갈 수 있도록 비춰 준 봄 햇살이었다는 것을.

優秀賞

위대한 조선의 왕들이시여 , 안녕하세요 !

草野 洋子〔千葉県〕

태조 전하 , 안녕하세요 ! 일본에서 만나러 왔어요 ! 아 ~ 이게 함경도 억새군요 ...
가을 햇살이 맑은 날의 동구릉 , 사극을 좋아하는 저는 위대하신 왕들을 만나러 왔어요 .

편히 쉬고 계실까요 ? 정말 파란만장한 말년이셨지요 ... 태조 드라마를 여러 편 봤는데 마지막에는 늘 마음이 무겁고 애절해졌어요 . 누구도 행복해 보이지 않았거든요 . 그토록 똑똑했던 방원을 조금만 더 믿을 수는 없었나요 ? 그랬다면 방원도 그렇게까지 냉철해해지지는 않았을 테고 왕자의 난도 일어나지 않았을지도 모르고 ... 방석을 세자로 세운 시점에서 분명히 집안싸움이 일어날 거라는 걸 아셨을 텐데 말이에요 . 그래도 후계자 싸움은 어느 시대 , 어느 나라에서도 있는 법이니까 ... 그렇게 간단한 문제가 아니겠지 ..

여기는 영조 . 이순제 씨 얼굴이 생각나네 ... 영조는 일본에서도 정말 유명해요 . 정말 오래 사셨네요 . 고생 많으셨어요 . 수원에서 뒤주 복제품을 봤는데 ... 참 마음이 아프셨겠어 ... 아버지로서 아들을 미워한 게 아나라 국왕으로서 나라와 왕조를 지키기 위해 사도세자를 희생시킬 수 밖에 없었던 거겠죠 . 후회도 많이 하셨을 것 같아요 ... 근데 여자를 보는 눈은 좀 없으셨던 걸까 ... 정순왕후는 성격도 독하고 욕심도 많은 사람이었잖아요 ~ 앗 ! 옆에 계셨네요 ... 정순왕후님 ! 미안해요 , 드라마의 영향 대문인지 왕후를 좋아할 수가 없어요 .. 드라마에서는 진짜 못된 계모였잖아요 ! 하지만 열다섯 나이에 욕망이 소용돌이치는 왕실로 시집와서 스스로 권력의 중심에 서서 예순하나의 나이까지 사셨으니 ... 아마도 강한 여성이시긴 했을 게예요 . 왕후 입장에서 그린 드라마가 있었다면 또 다른 인상이었을까 ... 근데 정실인 왕후님은 서오릉에 잠들어 계시죠 . 다음에 만나러 갈게요 .
거기에는 인현왕후님도 계시죠 ? 저 왕비들 중에서 인현왕후님을 가장 좋아하거든요 . 피부가 하얗고 청초한 분이셨을 거라고 혼자서 상상하고 있어요 . 근데 숙종이랑 장희빈도 서오릉에 장들어 계시니까 또 실례되는 말을 해 버릴지도 모르겠네 ...

문조대황 ... 효명세자구나 .「구르미 그린 달빛」의 모델이 되셨어요 ! 박보검이라는 잘생긴 배우가 연기했었는데 기록을 보느까 실제 효명세자도 용모가 뛰어나고 머리도 명석한 독서가이셨군요 . 어떤 모습이셨을까 ... 너무 궁금해요 . 만약 왕이 되셨더라면 조선왕 중에서 미남 넘버원이 되셨을지도 모르겠네요 !

마치 왕님들이 “안녕” 이라며 미소 떤 얼굴로 맞이해 주는 듯한 부드러운 바람이 불어와 시간이 멈춘 듯 현대도 과거도 아닌 시공간이 녹아든 듯한 그곳에서 왕들과 즐거운 한때를 보냈어요 .

優秀賞

차가운 아이스커피마저 따뜻했던 곳

樫本 來奈〔帝塚山学院大学〕

“넓은 벌 동쪽 끝으로 옛이야기 지줄대는 실개천이 회돌아 나가고….”

정지용 시인의「향수」는 이렇게 시작된다. 내가 추천하고 싶은 한국의 여행지는 바로 이 시가 태어난 곳, 충청북도 옥천이다. 옥천은 화려한 관광지는 아니지만, 나에게는 오래도록 마음에 남은 여행지다. 그곳에는 한 편의 시와 함께 사람들의 따뜻한 말이 머물고 있었기 때문이다.

옥천에서 내가 가장 인상 깊게 들은 말은 “감사합니다” 도, “안녕하세요” 도 아니었다. 바로 “밥 먹었어요?” 였다. 이 표현이 한국에서 자주 쓰인다는 것은 알고 있었지만 실제로 들었을 때는 신기했다. 시간이 지날수록 그 안에는 “잘 지내고 있어요?”, “힘들지는 않아요?” 라는 걱정이 담겨 있다는 것을 알았다.

특히 우리가 운영한 한일 교류 행사에서 있었던 일이 잊히지 않는다. 그날 우리는 긴교스쿠이와 카미후센 같은 일본 전통 놀이를 어린이들에게 알려 주고 있었다. 아이들이 즐거워하는 모습을 보니 기뻤지만 어느새 우리의 체력은 바닥나 있었다. 그때 전에 한 번 뵌 적이 있던 한국인 한 분이 환한 미소를 지으며 다가오셨다.

“밥 먹었어요?”

우리는 조금 멋쩍게 대답했다.

“아직이요.”

그러자 그분은 놀란 듯이 말씀하셨다.

“아이고, 이렇게 더운데 아직 밥도 안 먹었어요?”

그러고는 우리의 인원수를 세시더니 모두의 식사를 사 오셨다. 그리고 “맛있게 먹고, 힘내요” 라는 말을 남기고 홀연히 사라지셨다. 그 한마디를 들은 순간, 낯선 곳에서 긴장하고 있던 마음이 풀렸다.

조금 뒤에는 처음 뵙는 분이 차가운 아이스커피를 사 들고 오셨다. 땡볕 아래에서 마신 그 아이스커피는 사막에서 만난 오아시스 같았다. 손에 닿은 커피는 차가웠지만 그 안에 담긴 마음은 놀라울 만큼 따뜻했다. 아무렇지 않게 건네는 “밥 먹었어요?” 라는 말 속에도 차가운 커피 한 잔 속에도 사람을 생각하는 마음이 담겨 있었다.

정지용 시인의「향수」에는 “그곳이 차마 꿈엔들 잊힐 리야” 가 반복된다. 시인에게 옥천이 꿈에서도 잊을 수 없는 고향이었다면 나에게 옥천은 “밥 먹었어요?” 와 차가운 아이스커피 한 잔으로 기억되는 따뜻한 여행지가 되었다.

결국 여행은 사람으로 기억되는 것. 일본으로 가져온 가장 소중한 선물은 사진도 기념품도 아니었다. 그것은 옥천에서 만난 사람들의 따뜻한 마음, “밥 먹었어요?” 라는 짧은 인사였다. 여행에서 오래 남는 것은 장소의 화려함이 아니라 그곳에서 만난 사람들의 마음이라는 것을 나는 이번 여행에서 깨달았다.

佳作

내가 생각하는 한일 교류

高橋 里奈〔東京都〕

올해 월드컵이 열렸다. 우리 남편이 한국 사람이기 때문에 나는 일본 대표뿐만 아니라 한국 대표도 함께 응원했다. 대회가 끝난 후, 한국에서는 축구협회의 인사 문제를 둘러싸고 큰 논란이 일어났다. 왜 이렇게 많은 사람들이 목소리를 내는 것일까.

처음에는 단순히 축구에 대한 관심이 크기 때문이라고 생각했지만, 궁금해서 하나씩 찾아보다가 그 의문은 어느새 축구를 넘어 한국 사회와 역사로 이어졌다.

한국은 짧은 기간에 놀라운 경제 성장을 이루는 한편, 민주화에 이르기까지 수많은 갈등과 변화를 겪어 왔다는 것을 알게 되었다. 더 나은 사회를 바라며 사람들이 목소리를 내 온 역사를 알게 되자, 지금의 한국 사회도 이전과는 조금 다르게 보이기 시작했다. 축구에서 시작된 '알고 싶다' 는 마음이 어느새 나를 한국의 깊은 역사까지 이끌었다.

한국을 알려고 하면 할수록 일본인인 나 자신과도 마주해야 했다. 내가 몰랐던 역사가 있었고, 한국 사람들이 잊을 수 없는 일들이 있었으며, 내가 쉽게 말할 수 없는 아픔도 있었다.

한일 교류란 두 나라가 서로 사이좋게 지내는 것만을 의미하는 것이 아니라고 생각한다. 지워지지 않는 과거가 있는 한, 몰랐던 것을 알아야 할 때가 있는 것 같다. 내 나라를 다시 바라봐야 할 때도 있는 것 같다.

그렇게 느껴서 나에게 한일 교류는 결코 화려하기만 한 것이 아니었다. 때로는 아프고, 때로는 괴롭고, 때로는 잔인하다. 그럼에도 한 사람으로서 많은 것을 깊이 배우게 되는 과정이라고 느낀다.

나는 아직 한국을 '안다' 고 말할 수는 없지만, 알고자 하는 마음을 멈추고 싶지는 않다.

왜냐하면 한국을 알아 간다는 것은 남편을 알아 가는 일이기도 하고, 일본을 알아 가는 일이기도 하며, 결국 나 자신을 알아 가는 일이기도 하다고 생각했기 때문이다.

나에게 한일 교류란 과거를 알고, 현재를 바라보며, 미래로 이어 가는 것이다.

佳作

尹東柱를 추모하며

大江 千晴〔東京都〕

“千晴 씨, 이번에 윤동주 낭독회가 열리는데 참가해 볼래? 입상하면 멋진 상품도 있어.” 어느 날 한국어 강사님께서 내게 이런 말씀을 하셨다. ‘멋진 상품?’ 난 그런 말에 마음이 끌렸지만 발표할 때까지 열흘밖에 없었고, 무엇보다 내가 그분에 대해 모르는 것이 많았다. 그래서 이번에는 참여하지 않기로 했지만, 이를 계기로 그분에게 관심이 생겨 자세히 알아보게 되었다.

먼저 ‘하늘과 바람과 별과 시’를 읽어 봤다. 그리고 그분이 살았던 시대나 인생을 다룬 책을 읽은 뒤, 다시 시집을 펼쳐 들었다. 그렇게 난 그분의 시를 이해하고자 노력했다. 특히 인상적인 시는 ‘자화상’이었는데, 내 모습과 겹쳐서 묘사 하나하나가 마음속에 깊이 와닿았다. 나를 나 자체로 표현할 수 없었던 어두운 시대, 그는 우물에 비친 자신의 모습을 보며 미워하고 가엾게 여기고 다시 미워하다가 이내 그리워했다. 그분이 살았던 시대의 고민들과 다를 수 있으나, 난 육아로 고민하고 수많은 시행착오를 겪을 때마다, ‘어쩔 수 없지, 내 나름대로 최선을 다했어.’라며 날 다독이곤 했다. 한편 요즘 사람들은 어떠한가? 길거리 어디를 가나 이곳저곳 스마트폰 화면만 보며 남의 삶에 정신이 팔려 있는 이들이 많다. 과연 그분처럼 진정한 자신의 내면을 직시하려고 노력하는 사람이 얼마나 될까? 그분은 우리에게 자신의 결점이나 나약함을 직시하는 것은 어렵지만 그것들을 알게 되면, 남에게 다가가는 것이 그리 어렵지 않음을 일깨워 준다.

그리고 그분의 생애에서 가장 가슴 아픈 것은 ‘치안유지법’이란 부조리한 법률로 인해 일본의 형무소에서 27 살이란 젊은 나이에 옥사했다는 사실이다. 모국어로 표현하는 것이 어려웠던 시대에 그분은 끝까지 조선어로 시를 써 내려갔다. 목숨을 걸면서까지 지키고 싶었던 것은 무엇이었을까? 내게는 쉽게 답을 내리기 어렵다. 다만 어떤 가혹한 상황 속에서도 사람을 미워하지 않고 끊임없이 자신을 반성하고 모든 것을 사랑했던 그분이 숭고하게 느껴질 뿐이다.

지금은 K- 팝이나 한국 드라마를 통해 한국을 동경하는 사람들이 많아졌다. 그러나 옛날에 인간의 존엄을 묵묵히 지키려고 했던 한 시인이 존재했다는 것을 잊어서는 안 된다. 나 역시 내 마음에 부끄럽지 않은 삶이 무엇인지 늘 고민하며 살아가고 싶다. 그리고 언젠가 서울에 남아 있는 그분의 발자취를 따라 걸으며, 내가 살아가는 이유와 삶의 의미를 다시금 되짚어 보고 싶다.

佳作

지도로 만난 한국

鷲尾 有咲〔新潟大学〕

고등학생 때까지 나에게 지도는 어디까지나 길을 찾기 위한 수단이었고, 그 안에 담긴 지역의 모습까지 자세히 살펴본 적은 없었다. 하지만 한국에 관심을 가지게 된 후부터 지도를 보는 시간이 늘어나기 시작했다. 처음에는 유명한 관광지나 카페를 찾기 위해 지도를 봤지만, 어느새 목적지뿐만 아니라 그 주변까지 함께 살펴보게 되었다.

지도에는 관광 안내서에서 쉽게 접하기 어려운 공원, 시장, 도서관 같은 장소들도 표시되어 있다. 나는 그런 장소들을 보면서 "이곳에는 어떤 사람들이 살고 있을까?", "주민들은 주말을 어떻게 보낼까?" 라고 생각하게 되었다.

특히 서울의 지하철 노선도를 보는 것이 재미있었다. 처음에는 복잡하게만 보였지만, 자세히 살펴보니 각 노선이 도시의 다양한 장소를 연결하며 사람들의 생활과도 밀접한 관련이 있다는 것을 알게 되었다. 또한 많은 지역이 지하철역을 중심으로 발전해 왔기 때문에 노선도를 통해 도시의 구조와 사람들의 생활권을 어느 정도 파악할 수 있다는 것도 깨달았다.

나는 지도를 보며 특정 관광지보다 마을이나 동네와 같은 작은 지역에 관심을 가지게 되었다. 어떤 역 주변에는 작은 공원과 도서관이 많고, 다른 지역에는 시장과 음식점이 모여 있다. 이런 차이를 발견할 때마다 지역의 분위기와 특징을 상상해 보게 된다. 실제로 가 본 적은 없지만, 지도를 통해 한국의 다양한 마을과 동네를 간접적으로 여행하는 듯한 기분을 느끼기도 한다.

그리고 한국의 대중교통에도 자연스럽게 관심을 가지게 되었다. 버스와 지하철이 잘 연결되어 있어 차가 없어도 편리하게 이동할 수 있다는 점이 인상적이었다. 이러한 교통 시스템은 관광객뿐만 아니라 지역 주민들의 생활에도 도움이 되고 있다.

예전의 나는 "한국에 가면 어디를 봐야 할까?" 라고 먼저 생각하곤 했다. 하지만 지금은 "한국 사람들은 어떻게 살아가고 있을까?" 라는 점이 더 궁금해졌다. 유명한 관광지뿐만 아니라 지역 주민들이 자주 이용하는 카페, 공원, 도서관, 시장에도 관심이 있다. 그곳에서야말로 한국의 진정한 모습을 느낄 수 있다고 생각하기 때문이다.

나는 한국 관광의 매력이 단순히 유명한 관광지를 보는 것만은 아니라고 생각한다. 도시를 이해하고 그곳 사람들의 삶을 상상하며 아직 가 보지 못한 장소를 발견하는 과정 또한 여행의 중요한 즐거움이라고 생각한다.

나에게 지도는 더 이상 길을 찾기 위한 도구가 아니다. 그것은 한국을 더 깊이 이해할 수 있게 해 주는 하나의 창이다.

佳作

친구가 열어 준 새로운 세상

田中 紗季〔中京大学〕



“다음에 언제 놀래?”

“다음 주는 어때?”

“좋아! 또 카페 가자!”

T와 나누는 이런 사소한 메시지는 지금도 변함없는 우리의 일상이다. 10년이 넘는 시간을 함께한 가장 친한 친구와의 대화를 다시 읽다 보면, 나는 늘 어느 날의 일을 떠올리게 된다. 초등학생 때 T의 집에 놀러 갔던 날의 일이다.

“사키에게만 꼭 하고 싶은 말이 있어.”

조금 긴장한 표정으로 T가 말을 꺼냈다.

“나는 한국인과 일본인 사이에서 태어났어. 아빠가 한국 사람이야.”

그때의 나는 친구의 뿌리에 대해 깊이 생각해 본 적이 없었기에, 그 고백을 듣고 무척 놀랐던 기억이 지금도 생생하다.

시간이 흐른 뒤, T에게 그때 어떤 마음이었는지 물은 적이 있다. “그때는 사람들이 이런 나를 이해해 주지 않을까 봐 불안했어.” 그런 불안을 안고서도 용기를 내어 나에게 먼저 말해 준 것이 정말 기쁘고 고마웠다.

이 일을 계기로 나는 한국과 한국어에 관심을 갖게 되었고, T와 함께 한글을 배우기 시작했다. 글자를 하나둘 익혀 갈 무렵에는 운동장에서 나뭇가지를 들고 땅바닥에 우리의 이름을 한글로 크게 써 놓고 “안녕하세요! 저는 사키입니다! 저는 T입니다!” 라고 외치며 놀기도 했다. 지금 돌이켜 보면, 그 시간은 나의 첫 한일 교류였고, 다른 문화와 언어를 접하는 즐거움을 알게 된 소중한 기억으로 남아 있다.

그 경험은 초등학교 시절의 추억으로 끝나지 않았다. 나는 이후에도 한국어를 꾸준히 공부했고, 대학생이 되어 시드니의 한 카페에서 인턴십을 했다. 그곳 단골이었던 한 한국인 손님은 내가 한국어를 공부한다고 하자 무척 기뻐하시며, 오실 때마다 한국어를 가르쳐 주셨다. 서로의 문화를 나누며 우리는 친구처럼 가까워졌다.

그분과 이야기를 나눌 때마다 나는 T와 땅바닥에 이름을 쓰던 시절을 떠올렸다. 놀이처럼 시작했던 한국어가 어느새 누군가와 마주 앉는 이유가 되어 있었다.

돌이켜 보면, 내 한일 교류의 출발점은 T가 용기를 내어 자신의 뿌리를 이야기해 주었던 바로 그날이었다. 그날이 없었다면 나는 한국어를 배우지 않았을 것이고, 시드니에서 한국인 친구를 만나는 일도 없었을지 모른다.

“다음에 언제 놀래?”

지금도 변함없이 도착하는 T의 메시지를 볼 때마다, 한 번의 만남이 한 사람의 인생을 바꿀 수도 있다는 것을 실감한다. 나에게 한일 교류란 특별한 행사가 아니다. 눈앞의 한 사람을 더 알고 싶다고 생각하는 마음, 그 마음에서 시작되는 것이라고 나는 믿는다.

最優秀賞

岸野 由夏里〔京都府〕

ユンノリの一番乗りや四方の春

優秀賞

長谷川 佳菜〔八千代松陰高等学校〕

恋人と時が流れる清渓川

李 東映〔大阪府〕

指ハート 慣れぬ祖父母の えびす顔

佳作

大谷 康矩〔山口県〕

わんぱくや 薬菓ほお張り 花火空

水澤 佳乃〔新潟大学〕

ハングルが 読めて一歩が 軽くなる

森田 結衣〔長野県〕

カタツムリ 肌に塗る日を 誰が予想

田中 和美〔神奈川県〕

博多港近き釜山のチョノを焼く

最優秀賞

若本 朋子〔千葉県〕

예불 소리에 별들도 흔들린다 해인사 새벽

優秀賞

濱田 恵美〔埼玉県〕

노을진 하늘 아리랑 한 소절에 눈물 한방울

井戸沼 亜里沙〔東京都〕

서울역 이별 부모 향한 큰절에 내 눈시울도

佳作

江崎 定幸〔東京都〕

만 보 걸었네 ! ‘센류’ 글감 찾다가 동네 열 바퀴

黄田 汐音〔北海商科大学〕

괜찮다 해도 한 번 더 권하는 것 그게 바로 정



秋田 宗志〔筑波大学大学院〕

숨비소리에 바다도 숨을 쉰다 제주의 아침

鈴木 いさ美〔東京都〕

해바라기와 키를 겨루는 아이 한여름 마당

2026
韓日交流
作文
コンテスト





2026 韓日交流 作文コンテスト

2026
韓日交流
作文
コンテスト







www.koreanculture.jp